



このたびは印刷用『トーマスの飼い方』をダウンロードしていただき、ありがとうございました。PDFファイルを印刷してお読みなされる際には、以下の点にご注意下さい。

#### △注意事項▽

パソコンの画面で読むよりも印刷をしていた方がもちろん読みやすいのですが、A4の紙にぎつしりと文字が詰まった文書ファイルを大量に印刷すると、インクの消費量も多くなります。小説を全ページ印刷される場合には、ある程度のコストがかかることを予めご了承下さい。

その他、インクの使用量の目安や小説の綴じ方などをホームページの「勝手にQ＋A」に掲載しておりますので、是非ご覧下さい。

<http://www.kanmanabe.com/faq.htm#p5>

3月の最後の1週間を、僕は生まれてはじめて見た爬虫類と一緒に過ごした。そのほとんどの時間を僕たちはマンシヨンの一室で過ごし、そこで寝食を共にした。その1週間の間、僕は毎日大量の郵便物を受け取ったけれど、ほとんどが僕に宛てたものではなかった。

そして最後の日の朝、そいつはいなくなり、僕は社会人になった。

初日、堀田さん

そのマンシヨンに住むことを決めた理由は三つあった。会社から近いこと、即日入居可能だったこと、それから会社が出してくれる家賃補助の額ぎりぎりの賃貸料だったことだ。僕は大学の卒業式が終わると同時に6年間住んだアパートを引き払い、そこから電車で一時間ほど離れたこの町に越してきた。町の大きさでいうと前とほとんど変わらないだろう。どちらも中都市という言葉が似つかわしい規模だ。ただ、学生街の多かった地域がそっくりそのままビジネス街に変わったというくらいの違いはあった。

マンシヨンは国道沿いの6階建て。築11年のわりには外観に古びた印象はまったく受けない。内装のリフォームもしっかりしている。駐車場もあるし、屋根付きの駐輪場もかなり広い。全室フローリングでエアコン付き。キッチンにはガスコンロが二つ。トイレとバスルームはセパレート。割合大きなベランダもある。マンシヨンの入口にはよく手入れされた植木があつて、帰宅した住人と訪問客を毎日無言で迎え入れた。

4月1日の入社式までの2週間余りを、僕はがらんとした部屋の中で過ごした。物が少なかっただけではない。部屋が静かすぎたせいもあった。古いテレビを処分したばかりで新調するに至らず（主に金銭的な理由だ）、前から調子の悪かったCDプレイヤーが引越しのどさくさで動かなくなっていた。

それでもはじめの1週間は、荷物の整理と会社から与えられた課題をしながら、ときどき外に出て近所を歩き回っているうちにあつという間に終わった。けれども何日か散歩をして近所の様子がすっかりわかってしまうと、これといって外に出る理由がなくなった。荷物の整理がほとんど終わってしまうと残るのは会社の課題くらいだったが、それもある日突然、燃料が切れたみたいにする気が失せてしまった。誰かと会おうにも、近所には友達もいなければ知り合いもない。固定電話の移設の手続きをしていないせいで自宅の電話番号はまだない。携帯電話はあるけれど、昔からそんなにしょっちゅう鳴る電話でもない。そういう電話は持ち主が引越したからといって急に鳴る回数が増えるわけでもない。新聞は学生のときからちゃんと購読したことがない。通販でパソコンを注文したが、ベトナムの工場のストライキのせいでいつ配達できるかわからないと言われた。学生のと

使っていた古いノートパソコンは、プリンタサーバーとしてならまだ使い道があるだろう  
と思って大学の研究室に置いてきた。ゴミにするよりはましだと思ったが、寄付したから  
といって大して喜ばれたわけでもなかった。そういうわけで、ついこの間まであった数々  
の通信手段と娯楽メディアが僕の手元からなくなっていた。

そんな静かな部屋の中で聞くことができたのは、すぐ目の前の国道を走る車の音だった。  
車の音は昼夜を問わずほとんど絶え間なく、そしてうつすらと流れ込んでくる。物が少な  
いせいもあって、その音はいつまでも部屋の中に影のように残った。僕はその影を相手に  
しばしば独りごとを言った。ときどき音が止むと、田舎の小さなバス停に置いてきぼりを  
食ったような不安を感じた。

部屋の中にインターフォンの音が響き渡ったのは夜10時前のことだった。その音が自分  
の部屋のインターフォンの音だと気づいたのは、ドアをコンコンとノックする音が後に続  
いたおかげだった。僕はその音を聞くのがはじめてだったし（受話器のついたパネルの操  
作の仕方もよくわからなかったほどだ）、変わった音だったせいもある。ピョピョツと鳥が  
鳴くようなその音はどことなくバカにされたようにも感じる。

玄関のドアスコープから外を覗くと、見覚えのある男性が立っていた。僕はドアを開け  
た。

「はい」

「すいません、遅くに」とその男性は断った。見たことのある顔だった。「上の階に住ん  
でいる堀田といいます。昨日はどうもありがとうございました」

「ああ、いいえ」僕は返事をしながら、昨日の夜、マンションの駐輪場で転んだ自転車を  
起こそうとしている彼を手伝ったことを思い出した。自転車を停めようとしたときに、隣  
に停めてあった自転車が10台ほどドミノ式に倒れてしまったらしい。僕は外で食事をした  
帰りにたまたまそこを通りかかったのだ。でもわざわざその礼を言いに来たような様子で  
ないことはすぐにわかった。

「いまお時間はありますか？」と彼は僕に尋ねた。

「はい」と僕は答える。

「ちよつと事情がありまして。実はこれを預かっていただける方を探しているんです」そ  
う言って彼は足元に置いていたダンボール箱の中から小ぶりのプラスチックの衣装ケース  
を取り出した。ケースの蓋には小さな穴がたくさん開いていた。

「失礼ですが爬虫類は平気ですか？」

「爬虫類？」

僕が聞き返す前に、彼は衣装ケースを廊下の床に置き、ストップパーを外して蓋を持ち上  
げた。衣装ケースの中にいたのは爬虫類だった。赤土色の爬虫類。

「トカゲの一種です」

「随分大きいですね」と僕は言った。30センチほどの大きさがある。ぱつと見るとエリマキトカゲを少し太らせてうつ伏せに寝かせたように見える。

「でもこれ以上大きくはなりません。あの——こういうのは平気ですか？」

「まあ、人並みに」

「よかった」そう言つて彼は面長の顔にかかった眼鏡を右手で持ち上げた。「実は、今すぐに実家に帰らなければいけない事情ができました」

僕は表情を変えずに話の続きを待った。

「窓際に置いていただくだけでいいんです。エサは一日に一回で大丈夫です。掃除もいりませんし、臭いもほとんどありません。噛んだりもしません。1週間で構いません。昨日少しお会いただけでこうやつてお願い事するのは本当に気が引けるんですが、他に頼む人がいなくて困っているんです」彼はとてもすまなさそうな顔をして肩を落とした。「もちろんお礼はします。ヒーターやライトの電気代が少しですがかかりますからその分も含めて、ペット屋の相場くらいはお支払いします。どうか預かっていただけないでしょうか」いきなりお金の話が出たが、僕には『ペット屋の相場』というのがどのくらいなのかからなかった。

「そのペット屋ではだめなんですか？」僕はぱつと頭に浮かんだ疑問をぶつけた。返事はすぐに返ってきた。

「犬や猫ならいいんですが、爬虫類を預かってくれるところがないんです。もっと大きな町に行けばあるかもしれませんが、この近くにはないんです」彼は残念そうに言った。

「エサや必要な器具は全部あります。簡単な飼い方のマニュアルもあります。エサ以外に世話することもほとんどないんです。何かあってもそれば僕の責任ですから、ご迷惑をかけることは絶対にありません」

僕は眉をしかめた。確かに彼はかなり困っているように見えた。この爬虫類を見ず知らずの誰かが預かってくれるとはとても思えない。ましてや隣近所に誰が住んでいるのかも知らないようなマンションではなおさらだ。

「今すぐ実家に戻られるんですね？」と僕は聞いた。

「はい、11時前の電車に乗ればなんとか」

「そうですか——」僕は腕を組んだ。転んだ自転車を起こそうとしている彼の姿が思い浮かんだ。

爬虫類か。

「動物は好きですか？」

「基本的には」

「犬や猫を飼ったことはありますか？」

「ええ、かなり前に」

「爬虫類を飼うのは犬や猫よりも簡単です。都市生活者に向いているペットだと言われて

るそうです」

「どういうことですか？」

「飼いやすい、ということなんだと思います。散歩もいりませんし、鳴きませんし、臭くありません。狭いところで飼えますし」

「なるほど」

不思議な気分だった。飛び込みの爬虫類のセールスをされているみたいだ。そして僕は『都市生活者』という単語に妙な共感を覚えた。都市生活者。中都市生活者。僕は中都市生活者。

「さっき『何があっても』とおっしゃいましたが」と僕は言った。「もし僕がこれを預かるとして、万が一死んだり、逃げたりしたらどうなるんでしょう」

彼は一呼吸置きながら、その間に何かを考えているようだった。僕は彼から視線を外し、トカゲを見下ろした。赤土色のトカゲ。

「逃げることはあっても、死ぬことはないと思います」かなり思いつめた様子だった彼が口を開いた。「たぶん何もしなくても1週間くらいなら餓死はしないと思います。多少弱るでしょうけど」

「逃げるってことはありますか？」

「もちろんあります。たぶんいつも逃げることばかり考えてるんじゃないかと思っています」そこで僕は思わずふふっと笑ってしまった。逃げる、ことばかり考えてるやつを飼ってるやつ。

彼は何がおかしかったのかわからないといった様子で手をももぞもぞと動かした。

「もし逃げて」と彼は言った。「それは仕方ありませんね。あきらめます。僕のせいですから。とにかく蓋さえしてれば大丈夫です。大抵の場合は」

ケースの蓋はもちろん衣装ケースと同じプラスチックで、両端にストッパーがついていて、それをおろすとロックされるようになっていて。それはどう見てもただの衣装ケースだ。

——大抵の場合は。

「今までに逃げたことはあるんですか？」と僕は試しに聞いてみた。

「こいつは逃げたことはありません」彼はきっぱりと言った。

「こいつ以外には？」

そう言うと、彼はまた少し考えた。

「あります、二回だけ」

「二回？」

「はい。これまでに何匹か飼ったことがあります、そのうちの二匹が逃げました。飼い始めてすぐの頃です」

「同じトカゲですか？」

「種類は違いますが、全部トカゲの仲間です。トカゲが好きなもので」

そういう彼も、何となく爬虫類に近い顔つきをしている。何となく、だ。

まあいいか、と僕は心の中で呟いた。何となくそういう気がした。目の前の人物と足元のトカゲの両方に何となく好感が持てる。なぜだかはわからないけれど、そんな気がした。

「わかりました——預かりましょう」

「え！ 本当ですか！」彼の声がかん高く裏返った。

「ただし、責任は一切取れませんよ。逃げてでも死んでも」

「ありがとうございます！ 本当にありがとうございます、助かります！」

彼は満面の笑みを浮かべ、僕がもういいですよと言うまで頭を何度も下げた。

「すいません、一旦部屋に戻って必要なものを全部持って戻ってきます。すぐに戻ります」  
そう言って彼はケースの蓋を閉めてストッパーを掛けると、ダンボール箱を持って勢いよく階段を駆け上がった。ひよろひよろとした後ろ姿があつという間に踊り場の向こうに消えた。

僕は彼が置いていったケースの前でしゃがみ、穴から衣装ケースの中を覗いた。トカゲはさっきの姿勢からピクリとも動いていない。斜め上を向いて、ケースの角のあたりをじつと見ている。ときどき薄い瞼の皮がカメラのシャッターのようにぱちぱちと動く。瞼が下から上に向かって閉じることに気がつく。確か魚もそうだったか。

爬虫類は嫌いではなかった。子供のころから生き物が好きで、ゴキブリ以外の大抵の生き物を触ることに今でも抵抗はない。クモもヘビも大丈夫だ。トカゲなんてかわいいものだ。そういえばこれは何という種類のトカゲなのだろうか？

堀田さんは5分ほど戻ってきた。小ぶりのボストンバッグを肩に下げ、両手でダンボール箱を抱えていた。

「この中に必要なものが全部あります。簡単に説明していいですか？」

「どうぞ」

「この紙に必要なことは全部書いてあるんですけど」彼はそう言ってA4の紙をホッチキスで何枚か綴じたものを取り上げた。「ケースは窓際に置いて下さい。できればレースのカーテンの手前に。エサをやるとき以外は蓋は閉めたままで構いません。それからこの二つの線をコンセントに差し込んで下さい。ひとつはヒーターで、もうひとつはライトです。ヒーターにはスイッチがないのでそのまま大丈夫です。太陽が出ていない間はライトのスイッチを入れてください。基本的なセッティングはこれだけです」

電球ほどの大きさの丸いライトはクリップ式で、蓋の端に取り付けてある。ヒーターは薄いシート状のもので、ケースの底に貼り付けているようだった。

「わかりました」と僕は言った。仰々しいものを想像していたけれど、熱帯魚に比べれば随分装備が簡単に見える。

「あとはエサと水です。水はこの容器が空にならないように常に水を入れておいて下さい」

彼はケースの中にある丸い陶器を指差した。

「エサはこれです。一日に何回あげても構いません。食べるだけ食べさせておいてください。でも一日に一回は必ずあげてください。面倒ならたくさん入れておけば欲しいだけ食べてあとは残しますから」そう言つて彼はダンボール箱の中から円筒形のビンを取り出した。ビンの中にはウサギの糞のような形をしたカラフルなエサが入っていた。質感はドッグフードに似ている。ラベルには『イグアナフード』と書いてあった。

「これはイグアナですか？」と僕は聞いた。

「違います」と思つた通りの返事が返ってきた。「こいつはフトアゴヒゲです」

「フトアゴヒゲ？」

「はい。フトアゴヒゲトカゲ、通称フトアゴです」

「聞いたことないですね」

「ペット用としてはまあまあポピュラーな部類なんです」

「ふうん」

「本当はコオロギが一番いいんですけど、何かと世話が大変なので無精して市販のものを食べさせています。あと小松菜も食べます」

「コオロギと小松菜？」

「はい」

「変わってますね」

「そんなことないですよ。どっちも爬虫類のエサとしてはかなりポピュラーなんです。まあコオロギの方がポピュラーですけど」

ポピュラーが三回。

「エサを食べた日には必ず糞をしますが、そんなに手間はかかりません。この『トイレシート』を汚れが溜まったら交換してください。1週間で二回くらいは交換しないといけないと思います。犬用のものを小さく切つて使うんですが、すでに切つてあるものがあるのでそれを使ってください」

ケージの隅に四角いシートが置いてあつて、その上にイグアナフードと同じような形をした黒い糞がいくつか転がっている。

「糞さえちゃんとしておけば、他に掃除の必要はありません。もし興味があれば飼い方についての本も入れておきましたので、読んでみて下さい。色々詳しいことが書いてあります」

ダンボール箱の中には、器具やエサの他に薄い雑誌が何冊か入っていた。

「あと、あまり触らないようにして下さい。結構デリケートなので、むやみに触られるのを嫌いますから」

「わかりました」

「——ああ、もうそろそろ行かないと。本当に助かりました。ありがとうございます。絶

対に1週間で戻りますので、それまでどうかよろしくお願いします。本当にありがとうございます。ございました」そう言って彼はまた深くおじぎをして、エレベーターに向かって歩いていった。「このご恩は一生忘れません」という台詞が聞けるかと思ったが、結局彼は最後まで言わなかった。言いそうな気がしたのだけだ。

僕は彼がエレベーターに乗り込むのを見届けると、ケースとダンボール箱を部屋に入れてドアを閉めた。

ケースを置ける場所はひとつしかなかった。小さなダイニングキッチンにある幅80センチほどの出窓だ。奥行きは十分にあったし、レースのカーテンもあった。僕はそこに飾っていた二つの写真立てを別の場所に移し、そこに古新聞を敷いた。ケースはそこにぴたりとはまった。

そして再びインターフォンが鳴る。

ピョピョッ。

ドアに近づく、向こう側で堀田さんがももごと喋るのが聞こえた。

「すいません、堀田です。大事なことを忘れていました」

僕はドアを開ける。

「もうひとつお願いがあるんです」

「何でしょう」

「郵便物を代わりに受け取って欲しいんです」

彼が差し出した紙には、郵便受けのダイヤルの回し方と電話番号が書いてあった。

右に6、左に8

090・5163・xxxx

「506号室です。名前もあるのでわかると思います。手紙やダイレクトメールが結構来ますので、できれば毎日開けていただけると助かります。郵便受けが小さいのですぐに一杯になりますし」彼はそう言っ僕顔を見た。すまなさそうな顔はしているが、さっきより肝の据わった顔つきをしていた。「ダイレクトメールは全部捨ててくださって構いません。何かの案内のような葉書も捨ててください。ただし、九州から来た手紙だけは取っておいて下さい。そしてそういう手紙が来たら、僕に電話をして欲しいんです」

「九州？」

「はい。ちょっと込み入った事情があつて」と彼は答えた。あまり聞いて欲しくないといった様子だった。「すいません。別に話せない内容ではないんですが、ちょっと長い話なんです」と彼は弁解するように付け加えた。

「とにかく郵便受けを毎日開けて、九州から来たものは置いておけばいいんですね」

「はい。そして必ず電話を」



「わかりました」

『ミギロク、ヒダリツパ』。麻雀みたいでしょう？」

「は？」

「ダイヤルです」

「――確かに」

「麻雀好きですか？ 帰ってきたら麻雀やりませんか？ 近くにいいところがあるんです」

僕は曖昧な返事をした。

「色々と頼んでしまつてすみません。本当に助かりました。トーマスをよろしくお願いします」

「トーマス？」

「ああ、すいません、言つてなかったですね。トカゲの名前です。ちゃんとわかつてますから、呼んであげてください」

堀田さんはそう言つてにこりと笑うと、軽く会釈をしてから立ち去つた。

僕は椅子に座つてトーマスを横から眺めた。衣装ケースのプラスチックは半透明で、トーマスの姿はただの薄茶色の物体に見える。蓋の上から見ると、小さな穴から体の輪郭が部分的に見える。底に敷いた砂の上で、トーマスは固まったように動かない。

僕は堀田さんに言われたとおりにヒーターとライトのコンセントを差しこんで電源を入れた。ライトのスイッチを入れると、紫がかつた青白い光がケースの蓋を照らした。

「蓋は閉めたままでいいのかな」と僕は独りごとを言つた。昨日までの独りごとが独りごとでなくなつたような気がした。

『エサをやるとき以外は蓋は閉めたままで構いません』と堀田さんは言つた。確かにそう言つた。でもそれでは姿が見えないし、光の当たり方も不十分なような気がする。僕は立ち上がつて玄関のダンボール箱を運んでくると、マニュアルを出してテーブルの上に置いた。マニュアルは手書きだった。タイトルは『トカゲの飼い方』。

心得一 脱走が最大の罪

心得二 乾燥に注意

心得三 絶対禁煙

心得四 スキンシップはほどほどに

一行目は一番大きな文字で書いてある。あとの三行はそれよりも少し字が小さくて細い。最後の行のあとには小さな字がA4の紙一杯に並んでいて、ところどころに簡単なイラストも描いてあつた。決して几帳面とは言えない文字だった。何となく堀田さんの書いた字

ではないような気がする。文字から受けるイメージもそうだし、急用ができたからといってそんなに簡単に作れるようなものには見えない。かと言って、誰かに預けるときのためにあらかじめ作っておいたとも考えにくい。

——まあいいや。

僕は上から順番にさっと目を通し、ケースの蓋について書いてある項目を探した。それは一ページ目にあった。

ケージは大き目。全長（尾まで）の3倍くらいの横幅は必要です。蓋はしっかりとロックをしておくこと。重いものを載せたくらいでは逃げられることがあります！（辞書くらいではダメです！）

もうひとつは二ページ目にあった。

紫外線はガラスやプラスチックに吸収されるので、蓋をしている場合は穴を開けましょう。

「なるほど」と僕は思った。蓋の穴は呼吸のためだと思っていたけれど、こういう意味もあるらしい。

説明によると、ケージ（ケースだと思っていた。以後修正することにする）の幅は全長の3倍は必要だということだが、このケージは明らかに小さかった。トーマスの体長からすると、横幅が1メートル近いケージを用意しないといけないことになるが、とてもこの出窓に置ける大きさではない。それから気になったのは『紫外線』という言葉だった。

「紫外線？」

僕はマニュアルをもう一度見直した。紫外線についてはまた別の場所に詳しい記述があった。

紫外線の種類はいくつもありますが、そのうち爬虫類に必要なのはUV・Bと呼ばれる中波長の紫外線で、この紫外線を放射するものとして「爬虫類専用ライト」があります。

その下にはさらに小さな文字で紫外線の種類やその特徴についてかなり細かく書いてあった。最後のところには『ブラックライトではダメ！』と書いた丸い吹き出しがあった。僕はそこまで読んでもう一度ケージを見た。サイズこそ足りないものの、おそらくこのマニュアルに従ってお金をかけないように手作りで作ったケージなのだろう。それはどう見ても市販の小型の衣装ケースだったし、穴の開け方も雑だった。ライトの取り付け方も

危なっかしい。

僕はライトを消してからそれを蓋から取り外し、ストップパーを外してそっと蓋を開けた。「やあトーマス」と僕は言った。返事はない。さっきと同じ姿勢のまま同じ場所を見つめている。僕はトーマスの顔に向かってふっと息を吹きかけた。するとトーマスは少しだけ顔を横に動かして片目を細めた。片目だけだ。

「なんだ、動くじゃないか」と僕が言うと、トーマスはその形のまま、また動かなくなつた。

トーマスを見てぱっと目につくのは、顎の下と両脇腹にきれいに並んでいるトゲだ。顎の下をぐるっと回りこむように生えたトゲは、頬の少し上あたりでぴたりと止まっている。脇腹のそれは後ろ足の付け根までびっしり生えていて、後ろへいくほど小さくなっていく。大きさは違ふけれど、どちらもパイナップルの皮のような立体感がある。このトゲが『トアゴヒゲ』という名前の由来だろうというのは容易に想像がつく。

体全体を上から眺めてみると、胴体が円盤を飲み込んだみたいに扁平な楕円形に広がっているのが特徴的だ。その部分だけを切り離して考えれば、表面のごつごつした質感とあいまって亀の甲羅のように見える。胴体だけではなく、体の表面には無数の凹凸がある。顔を近づけてじっと観察すると、丸、四角、ひし形、六角形など、色々な形と大きさのウロコが体中をびっしりと覆っているのがわかる。見ようによつては細かい瓦屋根のようにも見える。局地的には規則正しく、そして全体的には複雑にその模様を変えながら、ウロコは体中を包み込むように広がっている。

斜め上から見ると、体がわずかに地面から浮いているのがわかる。トカゲというと腹をひきずって歩くイメージがあるけれど、どうやらこのトカゲは違ふらしい。太い足をしっかりと地面に打ち立てて、胴体を浮かせているのだ。

しばらくそうやってトーマスを観察しているうちに、何でもいいからとにかく触りたくなった。両手両足の鉤状の鋭い爪が僕の手を傷つけることも同時に想像した。それから僕の目は頬のあたりに空いた丸い穴に釘付けになった。穴は目よりも大きく、内側に膜のようなもの張っているのが見える。その穴から何か小さいものがごぞごぞと這い出てくるのをわけもなく想像してしまう。耳だ、と僕は思う。僕はその穴にめがけてさっきと同じようにそっと息を吹きかけてみる。けれども今度は反応しない。

「トーマス聞こえるか？」

トーマスは返事をしない代わりに瞬きをした。

「逃げないようにな」僕はそう言って蓋を閉めた。

脱走が最大の罪。刑務所員に向けた古典的な標語みたいだ。そして堀田さんはその最大の罪をもうすでに二度犯している。

## マニュアルの1ページ目（下半分）『餌について』

トカゲは爬虫類の中でも最も多様な食性を持つグループです。植物食性、動物食性、雑食性の3種類がいます。植物食性の代表はグリーンイグアナで、動物食性のものはモニターやカメレオンです。その他にペット用に流通している多くのトカゲは動物食寄りの雑食性が多く、昆虫・マウス・野菜・果物・配合飼料などを多様に与える必要があります。

餌として流通しているコオロギにはフタホシコオロギとイエコオロギの2種類がいます。フタホシは動きが俊敏でないため扱いやすいのですが、臭いがある、共食いする、寒さと乾燥に弱いなどの欠点があります。イエコは逆に飼いやすくて寿命が長いのですが、動きが活発なため扱いが難しいという欠点があります。どちらも餌として与えるときは、足を折って動きを制限してから与えましょう。

野菜、果物は大抵の種類を食しますが、中でも小松菜はカルシウムを多く含むためよく飼料として与えられます。また、飼育下で与える餌はどうしても栄養価が偏るため、サプリメント（栄養補助剤）の添加は不可欠です。粉末状のものは餌に混ぜたり、餌の虫の体に付着させて与えます。液体状のものは飲み水に数滴混ぜて与えるといいでしょう。いずれの餌も食べ残しはその日のうちに取り除くようにして下さい。

その夜、僕は寝室のドアを開けて寝た。ケージに取り付けたライトの光がベッドの上までぼうつと伸びてくる。ときどきトーマスの足がザッ、ザッと砂を擦る音が聞こえてくるけれど、眠りの邪魔にはならない。むしろ自分以外の気配が無機質な部屋の中に血の通った空気を作り出し、気持ちを落ち着かせてくれるような気さえる。

深夜になっても国道には車と人間の絶え間ない往来があり、光があり、影のような音がある。僕はその光と音から身を潜めるようにベッドに潜り込み、「トーマスおやすみ」と天井に向かって呟いた。このようにして僕とトーマスの短い共同生活が始まった。

## 2日目、郵便物

次の日の朝、僕は目が覚めると真っ先にトーマスの様子を見にいった。ライトを消して蓋を開けると、トーマスは昨日と180度反対の方向を向いていた。鼻先がケージの壁にぴたりとくっついていた。

「おはようトーマス」と僕は声を掛ける。レースのカーテンから太陽の光が射し込んで、

トーマスの体が昨日より赤く見える。僕はコーヒーマーカーでコーヒーを作りながら、堀田さんから預かった雑誌をテーブルの上に出した。雑誌は三冊あった。一冊目は写真ばかりが載っている図鑑のような雑誌の増刊号で、トカゲから始まって、カメとヘビ、それに両生類へと続いていく。ざっと見たところ、どちらかというと学術的な記述が多くて飼育方の参考になるような情報はあまりない。二冊目はいわゆるペット雑誌で、表紙はチワワだった。表紙の右下あたりに『特集！ 都会で流行爬虫類飼育（入門編）』と書いてある。試しにページをめくってみると、上品に着飾った犬や猫の写真がしばらく続いたあと、突然、薄い緑色のトカゲが人間の手の上に載っている大きな写真が現れた。口元と肩から背中にかけて、蛍光に光る黄色い縞模様がある。『ナイトアノール』という名前らしい。見開き二ページの小さな特集記事には、ナイトアノールを飼うにあたって揃えなければいけない器材やエサのこと、それから月々にかかるお金や飼い主のマナーに関することなどが書いてあった。ひと通り読んでみると、書いてある内容だけでなく、文体や使っている単語も例の手書きのマニュアルとほとんど同じだということに気がつく。ほぼ間違いないこの記事を参考に作られたのだろう。

最後の一冊は二冊目とまったく同じ雑誌で、真ん中あたりに同じような爬虫類の特集があった。取り上げられているトカゲの種類が違い、写真に写っている器材が少し古臭く見えたけれど、内容はほとんど同じだった。号数を見ると、4年前のものだった。この雑誌では4年に一度、爬虫類特集が組まれるのかもしれない。

僕は砂糖とミルクを入れたコーヒーを飲みながらトーマスの方を見た。ナイトアノールとは見た目が随分と違うけれど、ナイトアノールの飼育方をそのままフトアゴヒゲトカゲに当てはめているということは、分類学上は同じ種で、性質もよく似ているのかもしれない。

トーマスはさつきと同じ姿勢だった。広い方を向いていればいいのに、と僕は心の中で呟く。ただでさえ狭い場所でわざわざ壁に鼻をくっつけて、窮屈ではないのだろうか。半透明なプラスチックでは外の様子もろくに見えないだろうに。まあ見えたとしてもすぐ目の前にはまた別の壁があるのだけれど。

「トーマス、お腹すいたか？」

まだエサをやらなくても大丈夫だろうと思ったが、エサを食べているところを見たいという衝動が先に立つ。モグモグか、パリパリか、ゴリゴリか。歯はあるのか？

僕はダンボールからエサを出した。イグアナフード。ビンに貼ってあるシールにはイグアナの横顔の写真がプリントしてある。

『成体イグアナの組織・骨格形成に最適な爬虫類・両生類フード カルシウムとビタミンD3を配合 100%天然原料を使用』

僕は試しに三粒くらいを手にとって、ケージの中に入れてみた。エサ箱がないので、砂の上にぽとんと落とすだけだ。

「ほら食え、トーマス。コオロギじゃないけどな」

エサはトーマスのすぐ横にある。けれどもトーマスは動かない。壁に鼻をつけたままだ。僕は椅子に座ってコーヒーを飲みながら、トーマスから目を離さないようにする。わずかな動きも見逃すまいとする。しかしトーマスは動かない。腹のあたりがすうすうと膨らんだり縮んだりしているだけだ。逆に僕のコーヒーがなくなってしまう。僕は立ち上がってもう一杯コーヒーを淹れ、トーストをトースターに入れてダイヤルを回し、椅子のところに戻ってくる。トーマスの顔がさつきより少しだけエサの方に向いたように見える。「照れてるのか？」と話しかけてみる。ぱちぱちと瞬きをするトーマスの顔には愛嬌がある。「そういえばオスなんだろうか、メスなんだろうか」

僕はマニュアルと雑誌をもう一度見てみたけれど、トカゲの性別については何も書いていなかった。「トーマスっていうくらいだからオスだろうけど」と僕は独りごとを言う。チンという音がしてトーストが焼き上がる。僕はトーストを食べながら、また椅子に座わる。「いただきます」と僕はトーマスに向かって言う。するとトーマスがまるで電源が入ったクレーン装置みたいに急に体をくねらせて回転すると、落ちていたエサをぱくつと口に加えて飲み込んだ。噛んでいる様子はない。続けて残りの二つもあつという間に口に入れてしまう。エサを三つ食べ終わったトーマスは、またその場で動かなくなった。

「ほほう」

僕はイグアナフードをさらに10粒ほどケージの中に落とした。すると今度は一番口の近くにあったものから順番にリズムよく食べ始める。よく見ると何度か咀嚼しているようにも見える。でも表情は変わらない。

トーマスが最後のひとつを食べ終わるのを見届けると、僕は「ごちそうさま」と言って立ち上がってコーヒーメーカーのポットとカップを片付けた。それからケージの蓋を閉めて、ストッパーを掛ける。ライトを取り付けようとしたときに、蓋の穴からトーマスが体をくねらせて壁際に移動していくのが見えた。

昼前になって、僕は堀田さんの郵便受けを開けに行った。エレベーターを降りて右に曲がると、壁際に郵便受けがずらりと並んでいる一角がある。堀田さんの郵便受けは僕の右隣だった。真上の部屋ということだ。

メモの通りにダイヤルを回してみる。右に6、左に8。小さな扉を引くと、その中には郵便物が何通も入っていた。ほとんどがダイレクトメールのようだ。今朝からこの時間までにそれだけの数の郵便物が来るとは思えない。そもそも今日は日曜日だ。日曜日に配達があるのだろうか？ 彼は昨日出る前に開けなかったのだろうか？ 僕はそれを全部取り出し、扉を閉めてダイヤルを適当に回しておく。ついでに自分の郵便受けも開けてみただれど何も入っていなかった。

部屋に戻ると、僕はその郵便物をテーブルの上に並べた。数えてみると全部で9通あった。5通が就職関係のダイレクトメールで、駅前のデパートのダイレクトメールが1通。

同じく駅前のビジネスホテルのダイレクトメールが1通。あとの2つは葉書で、どこかの映画館から来た新作案内と近所の電気屋のセールの案内だった。

「ビジネスホテル？」

封筒をぱっと見た感じは分譲マンションの宣伝のように見える。堀田さんがここに泊まったことがあるのは間違いないが、どういいうきさつなのかはわからない。家の近所のホテルに泊まらなければならないときというのはどういいう状況なのだろうか。ビジネスホテルからのダイレクトメールを受け取ったことのない僕にはそれ以上想像することができなかった。

僕の思っていたような消印が押されていたのは電気屋の葉書一枚だけだった。その他のものにはすべて『料金後納郵便』のプリントがあつて、差出局はすべて市内だった。堀田さんがホリタノブユキという名前の学生だということがわかった。

堀田さんは「捨てていい」と言ったが、やはり他人の郵便物を開けずに捨てるのはどうも気が乗らない。かと言って勝手に開けるわけにもいかない。就職関係のものがこれだけあるのに「捨てていい」ということは、おそらくもう内定をもらっているのだろう。3月で内定をもらっているということは、就職活動はかなりうまくやったということだ。首尾よく推薦をもらったのかもしれない。1年前には自分も同じようなダイレクトメールを毎日山のように受け取っていたことを思い出す。僕はしばらくその郵便物を眺めながらどうするか悩んだ末、捨てずに全部デパートの紙袋に入れて取っておくことにした。

2時ごろにスパゲッティを一人で食べて(トーマスには何もやらなかったという意味だ)さつさと後片付けをすると、近所の大型書店へ向かった。マンションを出て、ひとブロック先の交差点を西へ曲がって片道一車線の県道に入り、20分ほど歩く。路線バスに乗れば5分の距離だが、僕はバスには乗らない。本屋に向かって歩いている間、僕の横をバスが二台通り過ぎた。

入り口の自動ドアが開き、詰め込まれた紙の臭いが風に乗って吹き出してくる。コミックのコーナーを抜け、僕は迷わず子供向けの図鑑が置いてある棚を目指す。棚の中にはよく似たタイトルの図鑑がいくつも並んでいる。一冊適当に抜き出して、最後の索引から『フトアゴヒゲトカゲ』を探す。名前を見つけてページを繰ってみると、十匹ほどのトカゲの写真の中にフトアゴがいた。『アガマの仲間』のページだ。

学名 *Pogona vitticeps*

生息 オーストラリア内陸部

特徴 多様な環境に棲息しており、砂漠から森林まで様々な所で見ることができる。

半樹上性とされているが乾燥地帯を好む傾向がある。昼行性であり、昆虫食が強い

雑食性。首から下顎にかけてトゲ状の鱗が発達する。

学名にも生息地にも興味がわからないが、『昆虫食が強い雑食性』という言葉に魅かれる。つまりトーマスは「何でも食べるができれば昆虫が食べたい」と思っているということだ。

次にペットコーナーに向かう。棚には犬と猫の飼い方を中心に、30冊ほどのペット関係の本が並んでいるが、ハムスターやカメラや熱帯魚の本はあってもトカゲについて書かれた本はなかった。犬と猫ではほんの少し犬の方が多かった。

雑誌コーナーにも寄ってみたけれど、爬虫類を飼っている人のための雑誌は見つからなかった。隅のほうに熱心な熱帯魚ファンが買うような雑誌を見つけたけれど、バックナンバーが1年分置いてあつてどれも背表紙が日焼けしていた。店員の怠慢のせいか、あるいは特別なこだわりのせいか。

しばらく雑誌を立ち読みしてから本屋を出て、スーパーに寄って夕食の材料と一緒に小松菜を一株買った。小松菜を自分で買うのはたぶんはじめてだと思う。正直に言って、ホウレン草と見分ける自信がない。

スーパーの裏手の川沿いの道を歩いていると、公園の桜の木の下で花見をしている中年の団体がいた。先々週からずっと天気が続いて気温が高かったせいで、気の早い木がすでにぼつぼつと花を咲かせていた。彼らはバッテリーに電気コンロをつないで鍋をやっていた。小さなテーブルの上にはスーパーの袋が載っていて、その中に缶ビールやつまみや鍋の材料が入っているようだ。どう見ても『花より団子』集団だった。飲むための大義名分を年中探し回っているタイプのグループだ。最近流行ったポップ・ソングを50過ぎの男性が高らかに歌っていて、その横で両手に持った携帯電話を交互に眺めている中年の女性がいる。その女性の横には小さく丸まった耳の短い犬が二匹ぺたりと頭を地面につけて寝ている。川の対岸にはその様子を見ながら子犬の散歩をしている女性がいて、彼女はしばらくこちらを見ていたが、やがて犬を引きずりながら歩き出した。犬は文句も言わずおとなしく飼い主に引きずられていった。

家に戻るとスーパーで買ってきたものを冷蔵庫に入れ、小松菜を一枚だけ取り出した。ケージの蓋を開け、それをトーマスの顔の前に差し出す。

「食べるか？」

小松菜を目の前ではたと動かしなくても反応しないので、僕はそれを半分に折ってケージの中に入れ、蓋を閉めてライトを点ける。

夕食を作っている間は部屋の中が少しだけ騒がしくなる。換気扇の音、水の音、フライパンを火にかけるときの音、冷蔵庫の開け閉めの音。死んだように静かだった部屋の空気が息を吹き返す。30分かけて作り、10分で食べ、5分で片付けをする。片付けをしてしまうと、部屋はまたもとの静けさを取り戻す。



## マニュアルの2ページ目『保温について』

ケージを用意したら、まずは保温設備を整えましょう。保温には「部分保温」と「全体保温」があります。部用保温はケージ内の一部分を、全体保温はケージ内の空気全体を暖めることを指します。部分保温には照明器具を使うのが一般的です。電気屋で購入できる通常の電球でも構いませんが、爬虫類用のライトは純粋に明かりを供給するだけでなく、爬虫類に必要な紫外線を供給する役割もあります。

照明器具以外にはフィルムヒーターがよく使われます。薄いシート状のヒーターで、これをケージの下に敷くことによってケージ内の床面が温められます。全体保温にはエアコンやファンヒーターなどの家庭用暖房器具や、園芸用ヒーターなどが使われます。基礎となる保温ですので、温度調整の機能があるものの方がいいでしょう。

この2つの保温を使う理由は、ケージ内に温度の傾斜を作ることです。つまり、彼らに好きな温度を選ばせてあげるのです（彼らは季節や時間帯や体調によって温度を選びます）。なお、保温と同時に気をつけなければならないのは、乾燥です。特にフィルムヒーターの上に水容器を置いている場合や、エアコンを使用している場合は注意が必要です。気づかないうちに水が蒸発していたり、ケージ内の湿度が極端に低下している場合があります。温度と合わせて湿度のチェックも怠らないようにしましょう。

ペー지의真ん中から下には、爬虫類の種類や大きさや数によってどういう種類のライトとヒーターを使うのがいいかを細かく指定した表があった。表のまわりにはライトやケージのイラストもいくつか書いてあって、衣装ケースを使ったケージの作り方にも触れていた。表には丸をつけたところが一箇所あり、そこに書いてある通りのライトとヒーターがトーマスのために使われているようだった。

再びケージの蓋を開けると、さっき入れた小松菜が消えていた。僕は小松菜をもう一枚持ってきて、さっきと同じように半分に折ってケージに入れてみた。しばらくすると、ぴくりとも動かなかったトーマスがゆっくりと体を動かして小松菜の方に歩み寄った。そしてトーマスがその端のところを口にくわえると、小松菜はシュレッダーにかけられたみたいに一定のスピードでトーマスの口に吸い込まれ始めた。それに合わせてトーマスの口が左右にぎりぎりとしり合わせるように動く。10秒ほどで小松菜はきれいに消えてなくなった。小松菜をもう一枚入れてやると、トーマスはさっきと同じ勢いで小松菜をぺろっと平らげた。機械仕掛けのように同じ動きだった。あればあるだけいつまでも食べそうな気が

した。

「コオロギ欲しいか？」とトーマスに聞いてみる。返事はないが、『昆虫食が強い雑食性』のトーマスがイグアナフードと小松菜だけで満足しているはずがない。そうは言ってもないものはない。

「とりあえずこれで我慢してくれ」

僕はイグアナフードを10粒ケージの中に入れ、容器に水をたっぷり入れるとケージを閉めた。

### 3日目、ペットショップ

次の日も朝起きると一番にトーマスの様子を見にいった。トーマスはケージの隅で体を丸くしてゆっくりと呼吸をしていた。エサは全部なくなっていた。

朝食を食べていると携帯電話が鳴った。あと5日前後でパソコンを届けられる予定だという内容の電話だった。わかりました、と僕は答えた。ノートパソコンを大学に置いてきたことを少し後悔する。

「トーマス、おまえは新しいパソコンを見れないかもしれないな」

トーマスは石の上に顎を乗せて瞬きをしていた。ケージの中にはこぶし大の石がひとつあって、トーマスはその上に体を乗せていることが多い。体全部は乗らないので、頭だけを乗せていたり、右前足だけを乗せていたり、尻尾を乗せていたりする。石にはケージの底のヒーターの熱が伝わらないので、体を冷やしたいときに使うのかもしれない。

トーマスの体の中で一番面白いのは足の形だ。人間でいうところの薬指が一番長く、中指、人差し指の順に短くなる。次に短いのは小指で、一番短いのが親指。要するに手の平をひっくり返しているように見えるのだ。ぱっと見るとリレーのボタンを受け取る準備をしているようにも見える。その奇妙な形の足は、前よりも後ろの二本の方がさらに極端な形をしている。指が全体に長いせいだ。

「リレーのランナーみたいだな」「そんなつもりはないんだ」「足は速そうに見えないけどな」「余計なお世話だ」そんな会話が頭に浮かぶ。もちろんトーマスは喋らない。ただ黙ってボタンを受け取る格好のままじっと前を向いている。ボタンを受け取る時には後ろを向かずに前を向いて助走すること、と誰かに言われたのをふと思い出す。

ゴミを出すついでに郵便受けを見にいくと、朝9時だというのに堀田さんの郵便受けには大量の郵便物が届いていた。ざっと見て昨日の倍はある。部屋に戻ると昨日と同じようにテーブルの上で郵便物をチェックしてみたけれど、量が増えただけで中身は大して変わ

なかった。封書と葉書を合わせて24通のダイレクトメール。就職関係が13通、昨日とは違うデパートのダイレクトメール、クレジットカードや公共料金の支払いに関するもの、国民年金の督促状、外資系の健康食品メーカーやレンタルビデオ屋からの案内など。封を開けなくてもそれだけで間接的にだが堀田さんの私生活が伺えるものばかりだ。九州から来たものはひとつもない。

九州と聞いて思い出すものといえば、別府温泉と出島と桜島くらいのものだ。足を踏み入れたこともなければ、九州出身の知り合いもない。九州七県の県庁所在地が全部県名と同じ名前だということを豆知識程度に知っているくらいだ。縁もゆかりもないとはまさにこういう関係のことをいうのだと思う。堀田さんに届くはずのその手紙がどういう重要性を持っているのか、ほんの少し気にはなったけれど、あまりロマンチックなものとは想像できなかった。恋人とか恋文とか遠距離恋愛とか、そういう言葉が堀田さんのイメージにどうも重ならない。

### マニュアルの3ページ目『照明について』

照明の目的は3つ。鑑賞効果を上げるため、保温効果、そして紫外線を確保することです。ケージの中を適切な明るさに保つことは、見栄えを良くすること以外にも体の異常を発見しやすくなるという意味もあります。多くの爬虫類には生きていくのに紫外線が、それも太陽光線に準ずるような紫外線が必要です。太陽光線が一番であることは言うまでもありませんが、その補助として適切な波長の紫外線を放射する照明器具が必要です。特に草食の爬虫類にとって紫外線は、体内で作ることができないビタミンD3を光合成することで、カルシウムの吸収を促進するという重要な意味があります。また紫外線には脱皮を促進する効果もあります。紫外線の種類はいくつかありますが、そのうち爬虫類に必要なのはUV・Bと呼ばれる中波長の紫外線で、この紫外線を放射するものとして「爬虫類専用ライト」があります。照明器具を使用するにあたって注意することは、電球類に水滴をつけないようにすること、器具はあくまでも太陽光の補助だということを忘れないことです。ケージはできるだけ直射日光を避けた明るい場所に置いてください（ただし、水の蒸発と熱射病に気をつけてください）。なお、紫外線はガラスやプラスチックに吸収されるので、蓋をしている場合は穴を開けましょう。

（以下、紫外線についてのさらに詳しい記述）

昼を食べに外へ出たついでに、家具の量販店でパソコンデスクを買った。店にはパソコンデスクが一種類しか置いていなかったので悩むことはなかった。『現品限り』のタグが貼

ってあって随分と安かった。デザインが気になったが、僕は近くにあった店員に声を掛け、それを持ち帰りたいと伝えた。「ばらさずにこのままのお渡しになります結構ですか？」と聞かれたので、僕は「はい」と答えた。トレイが飛び出ないように紐で縛ってもらって、それを持って国道沿いを15分ほど歩いて帰った。

エレベーターが最上階から降りてくる間に郵便受けを開けに行くと、つい4時間ほど前にチェックした郵便受けの中にまた葉書が2通届いていた。通信販売のカタログ請求の葉書と、市内にあるペット屋からの葉書だった。

#### 西日本最大の総合エキゾチックアニマルショップ「亜熱帯」よりセールのご案内

前略 堀田様

平素よりご愛顧いただき誠にありがとうございます。さて、当店では下記の日程で開店5周年記念セールを開催いたします。期間中、生体・器材・餌をすべて特別価格で販売させていただくほか、淡水大型魚の買取査定アップ、レンタル器材の割引などの日替わり特典もございます。ぜひこの機会にご来店くださいませ。

日程 4月1日(金)、2日(土)、3日(日)

営業時間 10時〜20時

部屋に戻るとカタログ請求の葉書を例の紙袋の中に放り込み、ペット屋の葉書に書かれていた住所を市内地図で探してどのあたりか見当をつけた。ここから歩いて行けない距離ではない。僕は買ってきたばかりのパソコンデスクをそのままリビングに置いて、葉書を持って家を出た。

ペット屋『亜熱帯』があるのは家具屋と反対方向だ。国道から少し西に入ったところにあるはずだった。マンションを出て30分ほど歩くと、道端に『亜熱帯』の看板が立っていた。

「この先の信号左600メートル」

そこに書いてある通りに歩くと、店はすぐに見つかった。建物の壁には大きなヘビとトカゲの絵が描いてあって、なぜか犬と猫のイラストが右下の方に小さく描いてある。店の前の小さな駐車場には車が二台停まっていた。

入り口の扉を開けると、銭湯に入ったときのようなもわっとした空気が下から上に吹き上げてくる。思わず息をとめて身構える。店の奥から誰かが「いらっしやいませ」と声を掛ける。僕は口から息を吐き出し、それからゆっくりとその湿り気のある空気に慣れていく。

思ったほど臭いはない。塩素っぽい臭いが少しするくらいだ。ごぼごぼと泡の立つ音が

店の中に充滿している。壁の一面に大きな水槽が並んでいて、様々な色の照明のおかげで、水槽の水が青や緑に複雑に染まっている。その水の中で、赤や黄色に輝く熱帯魚がきらきらと泳いでいる。店内の奥にはさらにスペースがあって、そこには水の入っていない水槽が同じように壁一面に並んでいる。爬虫類の気配がする。

僕は魚の水槽をひと通り眺めてみる。水槽のガラスには魚の種類と生息地と値段が書かれたプレートが貼ってある。水槽も装置も魚もきらびやかではあるが、僕の興味を引くようなものはなかった。魚の値段は5千円から2万円くらいのもが多く、一番安いのはエサ用メダカ 20円。

「エサ用メダカ？」

水槽の中にはメダカがうじゃうじゃと泳いでいる。エサ用メダカを買いに来る人間と、エサ用メダカを食べる動物のことを想像して少し気が滅入った。

魚の水槽の並びを抜けると、爬虫類のコーナーが始まる。入ってまず目に留まったのは、巨大な水槽とその中にいる一匹のカメレオンだった。プレートには『エボシカメレオン』と書いてある。カメレオンの体の色はくすんだエメラルドグリーンで、グレーの斑点模様がある。口を半分開けたまま、木の枝の上で背中を丸めて目を回している。本当に目をくると回しているように見える。一言でいえば間抜けな顔だ。それから尻尾がワラビミたいにくるくると巻いているのと、頭の上が細長く盛り上がっているのが特徴的だ。確かに烏帽子のように見えなくもない。

爬虫類の水槽は全部で20個ほどあった。端から端まで見て回ったけれど、フトアゴヒゲトカゲはいなかった。見た目も大きさも大小様々で、小さいものは小指くらいの大ささしかない。同じ種類でも大きさによって「ベビー」「ヤング」「アダルト」と種類分けがしてあって、別々の水槽に入れられている。ほとんどが「トカゲ」であり、ヘビの水槽が二つとカメの水槽が二つ、それとエサ用コオロギの水槽がひとつ。

エサ用コオロギ。一匹 22円。ヨーロッパ・イエコオロギ。爬虫類のエサとして最適、繁殖・ガットローディングの指導いたします、ということだった。

ガットローディング？ 見慣れない単語だ。何となくコオロギを磨り潰して与えるところを想像する。僕は近くにいた店員を捕まえて質問をする。

「このガットローディングっていうのは何ですか？」

店員はにこりと笑って答える。

「ガットローディングは、エサに栄養価の高いものを食べさせて、エサの体内に栄養を蓄積させることを言います。それをペットに与えることで、効率よく栄養を与えようということですね」

百科事典みたいだと僕は思った。

「エサっていうのはコオロギのことですか？」

「そうです。ブロイラーを太らせるのと同じ理屈です。太ったブロイラーを人間がおいし

く感じるのと同じですね。例えば悪いですが」

例えば悪い。彼は続ける。

「コオロギにはコオロギフードという特殊なエサを与えます。穀物や蛋白質などを特別に配合したもので、最近の水で練って与えるものがよく売られています。コオロギは水分不足に弱いし、水を飲んでいるときに溺れて死ぬことも多いので、水分不足を適度に補いながら安全に水をやることでできて便利なんです。コオロギフードをコオロギが食べて、コオロギをトカゲが食べる」

「なるほど」

「冷凍コオロギを与える方もいらつしやいますが、やはり生のコオロギが一番いいですね」  
「どうしてコオロギなんですか？ バッタやカマキリではなくて」

「さあ」店員は首を傾げた。「あまり専門的なことはわかりませんが、まず第一に繁殖しやすいというのがあると思います。あと一般的に言われることですが、トカゲは雑食性のものが多いので、とにかく食べるものを何でも与えるのが基本です。実際に大きいものになるとマウスを食べますし、野菜や果物など、大抵人間が食べるものは食べますから。でもコオロギがなぜいいかというと、はつきりとはお答えができないんです、栄養価が高いのは間違いないんですが」

僕は水槽の中でひしめき合うコオロギの群れを見ながら、これは買えないなと思った。堀田さんは「手間がかかるから」と言っていたけれど、そんなものではない。このコオロギたちの『足を折って動きを制限する』ことを考えると背筋が寒くなる。僕はコオロギから目を逸らして言った。

「コオロギを与えないとダメだってことはあるんですか？」

「いえ、そんなことはないと思います。やっぱり気持ちが悪いという方はいらつしやいますから、そういう方は人工飼料で済ませるそうです。カルシウムやミネラルなどの特定の栄養素を与えたいときにはサプリメントを使います。人間が飲むビタミン剤のようなものです」

僕はイグアナフードを思い出した。あれは人工飼料なのだろう。

「小松菜を食べさせるっていうのは本当ですか？」

「ええ、緑黄色野菜の中でカルシウムを一番多く含んでいるのが小松菜だそうです」

僕は感心した。マニュアルに書いてある通りだ。

「爬虫類を飼われる予定なのですか？」と彼が逆に質問する。

「友人からトカゲを譲り受ける話があって、何も知らないので予習をしようと思ひまして」僕は少しだけ嘘を言う。

「何という種類ですか？」

「フトアゴヒゲトカゲです」

「ああ、フトアゴですか。フトアゴはいいですよ、私も昔飼ったことがあります。飼いや

すいし、すぐ人に慣れます」

「ここにはいないんですね」

「今ちょうど在庫を切らしているんです、すみません。昔から人気が高いのでいつも置くようにはしているんですが」

在庫を切らしている。

「色々ありがとうございます、勉強になりました」と僕は言った。

「いいえこちらこそ。またお越しくださいます」と彼は笑顔で言った。

店の外は涼しかった。僕は長袖のトレーナーをばたばたとはたいて、トレーナーに染み込んだ臭いを振り払った。国道に出たところで、イグアナフードをフトアゴに与えても大丈夫なのかを聞くのを忘れたことに気づいた。食べるものを何でも与えていいのだから大丈夫だとは思わなければならない。それにあと五日間生きていてくれればそれでいいのだ。僕が心配することでもないだろう。

日が暮れる前にトーマスの糞の処理をした。糞はいつの間にか犬用トイレシートの上で増えていた。僕は汚れたシートを取り除いてゴミ箱に捨てて、新しいシートを同じ場所に置いた。トーマスはその間ケージの反対側でその作業をじっと見ていた。決まった場所で糞をする習性は猫に似ている。そして何となくだがトーマスは僕の前で糞をすることを避けているように思える。まだ見慣れないからだろうか、糞をする瞬間の環境に気を遣っているような気がするのだ。爬虫類が気を遣うなんていう話はもちろん聞いたことがないけれど、トーマスはそういうことについてあれこれ考えているように見える。堀田さん曰く『結構デリケート』らしいから（見た目からはそんな印象は受けないが）、僕が見ていると緊張して糞をしないとしてもさほど驚くようなことではないのかもしれない。何といても堀田さんの前でトーマスがどういう風に振舞うのかを見たことがないわけだし、僕は爬虫類を生まれてはじめて飼っているのだから、そのあたりのことは想像するしかないのだ。そして、犬や猫や他の僕が触れたことのある動物（言うなれば脊椎動物）に関する知識や経験をかき集めてトーマスに当てはめると、こいつは僕の前では糞をしたがっていないというひとつの観察結果が得られる。

夕食を食べながらエサをやった。いや、エサをやりながら夕食を食べているのかもしれない。どちらであれ、『同じ食卓についている』と言える状態だ。僕は小松菜の残りといぐアナフードを与えたあと、自分が食べたリングをひとかけら入れてみた。トーマスは「別にはじめてじゃないから」と言わんばかりにうまそうに食べた。手足をもちだコオロギをトーマスがむしやむしや食べているところを少し想像した。食べさせてやりたいのはやまやまだが、できれば食べているところは見たくないと思う。でもせめて冷凍コオロギでも食わせてやるか、と僕は呟いてみる。トーマスは返事をしないが、おそらく死ぬほど食べ

たいのだろう。「まあ、また今度な」僕は空約束をして、水容器に水をたっぷり入れてやる。最後に蓋を開けてしっかりとストップバーを掛けてライトを点ける。

キッチンの明かりを消して隣のリビングで本を読む。食事を済ませてしまうとそれくらいしかやることはない。外に出るのも面倒だし、一人でバーに行つて飲んだりはもともしない。トカゲがごぞごぞしているのを聞きながら本を読むのを心地良いと感じるタイプなのだ。そして僕は12時きっかりに眠くなる。

#### 4日目、松河さん

朝起きていつものようにコーヒーを入れ、夜通し点いていたライトを取り外してから蓋を開けてトーマスがちゃんとしていることを確認する。

「おはようトーマス」

いつもトーマスの方が先に起きている。こつちに顔を向けて挨拶代わりに瞬きをする。下の脛が重力に逆らつて滑らかに動く。

天気がいいのでキッチンとリビングの窓を開ける。冷たい朝の空気がさつと流れていく。国道の上を途切れ途切れに車やバイクが駆け抜けていく。あと3日で社会人か、とため息をついてみる。朝の冷たい国道を走る車は『社会人』という言葉を連想させる。その言葉に衣のようにまとわりついているのは、自覚であり、決意であり、責任であり、ある種のあきらめでもある。そういうものを背負った鋼鉄の塊が国道の上を群れをなして移動する。僕はまだその高さにいない。あと3日。今度は自然にため息が漏れる。

久しぶりに会社から与えられた本や資料に目を通す。入社前の課題はこれで三度目だ。最初はレポート、テーマは『自己啓発』。次は英語の試験。レポートは得意だが、英語はまったくダメだ。辞書だらうがインターネットだらうが何を使つてもいいと言われたものの、まともな解答ができなかった（結果がどうだったかは知らされていないけれど）。そして今は四冊の本と分厚い資料を使ってレポートを書いているのだが、最後のところがうまく結ばずに随分前から進んでいない。提出期限が入社当日だというせいもある。

キッチンのテーブルに座つて自分が書いたレポートの1ページ目を読み始めて、3行目ぐらいざりしてやめる。

「こんなに平和な一日の始まりに、こんなことをやるべきじゃないんだ。な？」

僕はわざわざ椅子から立ち上がつてケージを開け、トーマスに同意を求める。

トーマスは目を丸くしてこちらを見ている。瞳孔が大きく開いているのだ。これも観察から得られたひとつの結論だが、トーマスの目はこちらがゆっくりと動作しているときはとても大きい。逆に突然蓋を開けたり、ばたばたと動いているときには瞳孔がしばんで目が小さく見え



る。今日はトーマスも穏やかな気持ちでいるのだろう。

「な、トーマス」

僕がそう言うと、トーマスは一瞬動きを止めて、そして「グスッ」という音を出して顔を震わせた。たぶんくしゃみをしたのだと思う。

突然トーマスを触りたいという欲望が頭をもたげてくる。これだけ近くで見ているのに、僕はトーマスの皮膚の感触を知らない。小さいところにトカゲやヤモリを触った経験からすると、見た目よりも柔らかいのではないかと推測する。ウロコごと伸び縮みする弾力のある皮膚。くすんでいて艶のない皮膚。触るとぼろぼろと崩れそうな、地層の断面のような土色の皮膚。粗い紙やすりを思わせる、指先がガジガジと引かかりそうな皮膚。乾いているようで、湿っているようにも見える皮膚。

トーマスを触りたい、と僕は思う。単なる好奇心か、あるいは何か愛おしさのようなものが働いてそう思うのか。

僕はヒーターのコンセントを抜いてケージを持ち上げた。蓋は外れている。それをリビングの真ん中に運んで床の上に置く。一人掛けのソファに座って斜め上からケージを見下ろす。トーマスのしっぽの先端だけがケージの手前の壁の陰になって見えない。トーマスは前足を砂にめりこませて体を動かそうとする。脇腹の皮膚が縮んで何本かしわが寄る。首がこちらに向く。トーマスと目が合う。

「逃げたいか？」

僕は尋ねる。トーマスは虚ろな目をしてこちらを見ている。僕は前かがみになってケージを覗き込む。トーマスとの距離が縮まる。トーマスの体がふうと膨らんだように見える。緊張しているのかもしれない。僕はソファに深く座りなおし、足を上げて膝をかかえる。トーマスは左の前足を石の上に乗せる。

僕はしばらくそのままの姿勢でトーマスを観察した。トーマスはこれといった動きを見せない。ケージをよじ登って十分外に出られる環境なのに。蓋が開いているという状態がわからないのかもしれない。いや、そんなはずはない。こいつは逃げたがっているのだから。

1時間ばかり時間が経ったところで、僕は根負けをする。トーマスには、ここでケージから出ても、本当の脱走にはならないことがわかっていたのかもしれない。確かにその通りだ。ケージの外にはまだマンションの壁という大きな壁が立ちふさがっている。

ケージをもとに戻して蓋を閉めると、郵便受けを開けにいった。郵便受けの中はもちろん空っぽではなかった。けれども少し数が少ない。全部で7通。ダイレクトメールが6通と、黄色い封筒が1通。封筒を手にとつて見ると、どう見ても私用の手紙だった。表にはここの住所と堀田さんの名前が書いてあり、裏には松河ゆかりという名前と大分の住所。消印は大分中央郵便局だった。

部屋に戻ると僕はすぐに堀田さんに電話をかけた。呼び出し音が6回鳴ったあと、留守

番電話に切り替わる。

「もしもし、堀田さんですか。大分から手紙が届いています。どうすればいいか連絡を下さい。僕の電話番号は――」

封筒を持って照明に透かしてみると、黄色い封筒の中に便箋が一枚折って入れてあるのが見えた。内容まではわからないが、そんなに長い手紙ではない。僕はそれをテーブルに置いて、携帯電話をその上に置いた。昨日買ってきたパソコンデスクを雑巾で拭いたり部屋の片付けをしながら電話が鳴るのを待ったけれど、昼になっても堀田さんから連絡はなかった。

その日は久しぶりに近所を散歩した。散歩ついでに本屋にも寄って長い間雑誌を立ち読みした。遅めの昼食をファーストフード店でとり、日が暮れてから家に戻った。

マンションに入る手前で、郵便受けの前に若い女性が立っているのが見えた。その女性は天井に埋め込まれた途切れ途切れの電球の明かりの下で何かを見つめていた。僕が近づいていくと、彼女は足音に気がついて、はっと背中を伸ばしてこちらを見た。僕は顔が確認できる程度に目を合わせ、軽く会釈をする。彼女は僕の横をすり抜けるようにしてそのスペースから出て行き、僕は自分の郵便受けの前に立つ。ダイヤルを回して扉を開けてみたが何も入っていない。一瞬堀田さんの郵便受けを開けるかどうか迷うが、女性の気配がなくなったので右隣のダイヤルをいつものように回した。右に6、左に8。マンションの住人が郵便受けを二つ開けるという行為は考えてみれば普通ではない。事情を知らない他人にはできれば見られたくない。そして扉の中にはいつものように大量の郵便物。僕はそれをかき出すようにして集め、両手に持って肘で扉を閉めた。

エレベーターに向かって歩き出すと、さっきの女性がエレベーターに乗り込むところだったので、僕は早足で乗り込んだ。彼女は小さ目のボストンバッグを両手で持っている。ステンレスのパネルの上で5階のボタンが点灯している。両手で郵便物を抱えている僕を見て、彼女が「何階ですか？」と尋ねた。「4階をお願いします」と僕は答えた。

エレベーターの扉が閉まり、エレベーターが動き出したところで彼女の視線を感じた。

「あの」と彼女が僕の顔を見ながら言った。「堀田さんですか？」

「え？」僕は驚く。僕は堀田さんではないが、堀田さん宛ての郵便物を抱えている。視線を落とすと、一番上の封筒に堀田さんのフルネームが克明に印字してあるのが目にとまる。

エレベーターが4階で止まった。僕と彼女は顔を見合わせた。

「堀田さんのお知り合いですか？」僕は右足でエレベーターの扉を押さえながら言う。

「はい」と彼女は答える。僕は堀田さん宛ての郵便物を持っているのを不審に思っている表情。僕は簡潔な答えを頭の中で速やかに組み立てる。

「留守の間、これを頼まれているんです」そう答え、手に持っているものを少しだけ持ち上げてみせる。彼女は表情を変えずに僕の顔を見る。つぐんだ口元が僕にプレッシャーを

かける。

「しばらく実家に戻られるそうです」僕は短く補足する。彼女は無言のままだ。よかつたらエレベーターを降りませんか、と僕はシグナルを送る。伝わったかどうかはわからないが、僕はエレベーターを降りた。彼女もすぐ後に続いて降りた。

4階。外は暗い。廊下にはいつもの通り誰もいない。

「先週の金曜日から留守なんです」と僕は言った。それと同時にエレベーターの扉が閉まり、ひとつ上の階へ向かって動き出す。

「1週間で戻るとおっしゃってましたけど」と僕は言う。彼女の表情が少し柔らくなる。

「すいません、疑ったわけではないんですけど。ちよつとびっくりして」

「いえ、いいんです。確かに変ですから」僕は少しだけ笑ってみせる。

「私、堀田さんの知り合いで、松河といいます」彼女はそう言っただけでほんの少し頭を下げる。

「松河さん？」僕は手紙のことを思い出す。彼女はその反応に何かを感じたようだ。「失礼ですが、大分の？」と僕はすぐに言葉を足す。

「え？」と彼女は驚く。

「手紙が今日届きましたよ。堀田さんはまだ知らないんですが」

彼女は動揺を隠さない。ここは一気に説明をした方がいいだろうと僕は判断する。

「話す少し長いんですが」と僕は前置きしてから、事の成り行きを話した。

話は駐輪場で堀田さんに会ったことから始まって、今日の昼はじめて堀田さんに電話をして留守番電話にメッセージを残したところで終わった。トーマスを預かることと郵便受けを開けることを頼まれたことも説明した。その間彼女はときどき目で相槌を打ちながら黙って僕の話を聞いた。

話が終わるとようやく彼女は納得し、何とか信用してくれたようだった。けれども彼女の表情はまだ少し固い。彼女は思いつめた様子で短いため息をついてから言った。

「お時間があれば、少し聞いていただきたいことがあるんです。近くに喫茶店か何かがあれば――」

「いいですよ」と僕は言う。それから彼女に断って一旦部屋に戻り、郵便物をテーブルの上に置いてからまた部屋を出た。鍵をかけようとしていると、松河さんがこちらに近寄ってきて言った。

「あとでトーマスを見せていただいてもいいですか？」

「もちろん」と僕は言った。「それともいま連れてきましょうか？」

彼女が迷っているようだったので、僕は「ちよつと待って下さい」と言っただけでまた部屋に戻り、ケージを廊下まで運び出した。

蓋を開けるとトーマスはいつものように前を向いてじっとしていた。表情もいつもと同じだった。特別愛想を振りまいたりはいらない。

「トーマス、元気か？」と僕は話しかける。

「こんにちはトーマス」今度は彼女が話しかける。

「爬虫類は平気ですか？」

「見るくらいなら何とか。堀田さんから話は少し聞いていましたし」

僕は堀田さんと松河さんの関係について少し考えてみる。話を少し聞いている程度の仲。

「思っていたより大きいです」と彼女は言った。

「トカゲっていうのもう少しかわいいやつを想像しますよね」と僕は言う。別にトーマスのことをかわいくないと思っているわけではないけれど、一般的に言えばトーマスの外見は決して『かわいらしい』ものではない。

「衣装ケースで飼ってるんですか？」

「そうみたいです。蓋さえあれば何でもいいみたいなんですけど、堀田さんが持ってきたままなので何とも」

「そうですか」

彼女の喋り方からは、あまりトーマスに興味を抱いている感じは受けない。トーマスはいつもと違う環境で自分が見られていることにもほとんど動じていない様子だ。

僕は松河さんがそれ以上トーマスについて話さなくなったのを確認して、ケージの蓋を閉めた。

「もしよければうちでもコーヒーくらいなら出せますけど」

僕は言おうかどうか迷っていた台詞を言った。すると彼女はほとんど迷わずに「お邪魔してもいいですか？」と答えた。

僕は部屋に入って玄関の明かりをつけ、彼女に新品のスリッパを勧めた。キッチンの明かりをつけたところで、キッチン以外に誰かとゆつくり話をする場所がないことに気がついた。リビングには一人掛けのソファと空のパソコンデスクがあるだけだ。床の上にはダンボール箱がいくつも転がっている。

「ここでもいいですか？ まだ引越してきたばかりで」僕はキッチンのテーブルを勧める。

「そうなんですか」と彼女は不思議がる。僕は先々週ここに入居したことで、4月から仕事が始まることを説明した。

「住み始めてすぐなのに、よく預かりましたね、人のペットを」

「まあ――断れない性格で」そう言うとき松河さんは少し笑った。

僕がケージをもとの場所に戻している間に、彼女は床にボストンバックを置いて椅子に座った。僕はライトを取り付けてスイッチを入れる。

「コーヒーでいいですか？」

「はい、ありがとうございます」

「荷物、よかったら向こうに置きますけど」と僕は尋ねる。

「いえ、大丈夫です」と言って彼女はバッグをちらつと見る。「実は今日こっちに着いたばかりで」

「大分からですか？」

「はい」

コーヒーマーカーがごぼと音を立ててコーヒーを落とし、それをガラスのサーバーが受け止める。コーヒーが落ちきったところでサーバーを外して用意しておいたカップに注ぐ。

「砂糖もミルクなしで」と松河さんが先に答える。僕は砂糖とミルクを入れる。

「さてと」

「はい」

「何から伺ったらいいんでしょうか」

「まずはこれを見ていただきたいんです」

#### 堀田さんの手紙

お手紙ありがとうございます。まさかお返事をいただけると思っていなかったので、本当に驚きました。何よりあなたと連絡が取れたことでようやく僕も安心して眠ることができます。

あれから5ヶ月。月日がたつのは本当に早いものですね。僕は毎日あのときのことを思い返します。記憶はいつまでたっても鮮明で、同じように眠れなくなるときがあります。思い出すのはいつも夜です。もっと何かできるのではないかという焦り。その日自分が何を結果として残せたのかを振り返るたびに沸き起こる不安。ほんのわずかな充実感。あなたの笑顔。そういうものが夜になると一斉に押し寄せてきて、僕を眠りから遠ざけます。

でも僕は正直に告白します。僕はあなたに出会うきっかけとなったあのトカゲの存在に、心の片隅で感謝しています。僕はあいつのおかげであなたに会えたのですから。でもあともう少し、あなたといわれたら良かったと思います。僕たちの関係がもっと落ち着く時間があれば良かったと思います。泥が水の底に沈んでしまうような、そんな時間が必要だったのだと思います。

ひとつ伝えなければならないことがあります。いま住んでいる場所を、今月末までに引き払わなければならない事情ができました。次の連絡先はまだわかりませんが、電話もしばらく繋がらなくなると思います。前に話したことは関係ありませんので、心配しないで下さい。ときが来たら、こちらから必ず連絡します。それまで待っていて下さい。

あなたとあなたの家族、そしてあなたの心とあなたの家族の心が負った傷が、僕

のちっぽけな力くらいではどうにもならないくらい深いことを僕は知っています。いつか癒えると願うことがどれだけ傲慢かもわかっています。それでも僕はトカゲの爪痕がいつか癒えるものだと思っています。同じように、あなたとの関係がもっと深まることを願う傲慢さを、僕は捨てられません。

あなたに会える日まで。

堀田

2005年3月26日

「僕が読んでいいような内容だと思えませんが」

読み終わると僕は最初にそう言った。

「はい、でもそうしないと伝わらないことがあるので」と松河さんは言った。「この手紙が届いたのは昨日です」

「26日っていうと、堀田さんがうちに来た日ですね」僕は手紙の最後の行を見て言った。

「封を開けたのが夜中だったので、朝起きてから急いで準備をして家を出ました」

僕は腕を組んでその手紙を見つめた。

「去年の10月の台風23号のことをご存知ですか？」

「去年一番大きかった台風ですよ」

「そうです」と松河さんは言った。「私はそのとき兵庫県の豊岡市にいて台風の被害に遭いました。しばらくは半壊した自宅にいたんですが、復旧の目途が立たないので大分の母の実家に住んでいました。冬の間だけと思っていたのですが、まだ豊岡には帰れそうもありません」

台風のあとでテレビで繰り返し流れた映像が頭をよぎった。氾濫する川の様子、バスの屋根の上で救助を待っている人たち、被害に便乗する悪徳業者のニュース、処理が追いつかないゴミの山。

「台風のあと、たくさんボランティアの方が来てくれたのですが、あるグループの中に堀田さんがいたんです」

「グループ？」

「はい。でも元々はボランティア団体のようなものではなくて、爬虫類が好きな人たちが集まって作った愛好会だったそうです。名前は忘れましたが、覚えにくいカタカナの名前でした」

「爬虫類愛好会がボランティアですか？」

「はい。でもはじめの目的はボランティアではなかったそうです」

僕はぬるくなったコーヒーを一気に半分ほど飲む。

「どういふことですか？」

「愛好会のメンバーの中に、豊岡市に住んでいる方が三人いたんだそうです。何でも会の中でもかなり古くからのメンバーで、中心的な人物だったそうです。その三人がかなりの数の爬虫類を飼っていたようで――」

「爬虫類が逃げたとか？」僕は思いついたことを言ってみた。すると松河さんが首を縦に振った。

「三人のうちの一人の家が半壊して、そこで飼っていたヘビがほとんど全部家の外に逃げたそうなんです。ヘビの体が大きかったので見つけやすかったのと、周りにある家が少なかったおかげで最終的には全部捕まえられて大事には至らなかったのですが、堀田さんの話では、その中に猛毒を持ったヘビがいたんだそうです。人が咬まれると即死するような猛毒だったそうです」

「ものすごい話ですね」と僕は言った。「戦争中に動物園の動物が毒殺された話を思い出しますけど」

「ええ、私もそう思いました」

その台風のニュースはテレビでも毎日報道されていたし、新聞やインターネットなど、あらゆるメディアで連日取り上げられていたけれど、猛毒を持ったヘビが逃げたというニュースは聞いた記憶がない。

「堀田さんをはじめはそのメンバーを助けるためと、逃げたヘビを捕まえるためにわざわざ豊岡まで来たんだそうです」

「それで事なきを得たあとにボランティア活動ですか」

「はい。全員が残ったわけではないそうですが、さすがにあの惨事を見てこのままでは帰れないと思った人たちが何人かいたらしいんです」

「そういう人たちが自主的に残ってボランティア活動をした、と」

「ええ、堀田さんの話を聞く限りでは」

「それで――」僕はもう一度手紙を見ながら言った。「この何度か出てくる『トカゲ』っていうのは？ 巨大なトカゲが町を襲った、みたいに読めますけど」

「はい」と松河さんは神妙な顔をして言った。「日本の台風にも名前があるのをご存知ですか？」

「え？」

「私も堀田さんに教えてもらうまで知らなかったのですが、5年前からアジアでも台風の名前をつけるようになったんです」

「初耳ですね」

「それまでは地球上の台風すべてにアメリカが英語名をつけていたのですが、アジアではあまり馴染みがないので、それに独自の呼び名をつけることになったそうなんです。アジア各国の防災機関が何かが集まって真面目に取り決めたものだそうです。それで去年の台

風 23号の名前が『トカゲ』だったんです」

「本当ですか？」

彼女はうなずいた。「私もそれを聞いてから少し調べてみましたが、本当みたいなんです。名前は全部で140個あって、それが台風の発生した順番につけられていく仕組みです。名前が最後まで行くとまた始めに戻る、これをずっと繰り返すそうです。計算では5年くらいで一巡するそうです」

「それは日本語の名前なんですか？」

「いえ、参加した国がそれぞれ名前を持ち寄って140にしたそうです。北朝鮮も参加していて、なぜかアメリカも名前を提供しているそうです。決められた名前は、植物や自然に関する名前や人の名前など色々です。ちなみに日本が提供した名前は全部星座の名前でした。うさぎ座やコップ座なんていうのもありました」

「聞いたことがないですね」

「でも実際にあるそうです、そういう星座が」

「トカゲ座も？」

「はい。そういう話です」

妙なことを思いつく人がいるもんだ、と僕は思った。それを国家間で真剣にやるのだからすごい。ワイドショーが好きそうな話だけれど、あいにく僕のところまでは届かなかったようだ。

「まあトカゲのことはわかったとして、気になるのはここですよ」僕は手紙の後半部分を指して言った。松河さんが大きくうなずく。

いま住んでいる場所を、今月末までに引き払わなければならない事情ができました

「堀田さんはもうここには戻ってこないっていうことですか？」

「たぶん——そうだと思います」

「困ったな」と僕は呟く。「それにこの一文も気になりますが」

前に話したことは関係ありませんので、心配しないで下さい

「それが一番お話ししなければいけないことなんです」と松河さんは言った。「ご迷惑になるかもしれませんが、聞いていただけますか？」

僕は黙ってうなずいた。

「堀田さんたちが引き上げる3日くらい前だったと思います。夜、堀田さんと二人でいたときに、お金に困っているというようなことを堀田さんが私に言ったんです。クレジット



カードのキャッシングがかさんで返済できなくなりそうだと」

僕は郵便物の中にカード会社からきたものがいくつもあったことを松河さんに話した。

「たぶんカードを作りすぎたんだと思います」と松河さんが言った。「審査なんていい加減ですし、学生でもいくらでもカードを作れますから」

「堀田さんは取り立てから逃げるために？」

「それもあると思うんですが、もうひとつ——これを見てください」そう言って松川さんはポストンバッグの中から一枚の紙切れを取り出した。小さな新聞記事の切り抜きだった。

#### 爬虫類を密輸・密売容疑の輸入業者ら逮捕

11日午前、兵庫県豊岡市の漁港に停泊していた漁船から、ワシントン条約で商取引が規制されている爬虫（はちゅう）類が発見された。警視庁は、漁船に乗っていた大阪府東大阪市の爬虫類輸入卸業 波多野明弘（35歳）と兵庫県豊岡市ペット店経営者 井藤英一（41歳）の両容疑者を、種の保存法（譲渡の禁止）違反の疑いで逮捕した。漁船内にはホウシヤガメやビルマニシキヘビなど、絶滅の危機にあるとしてワシントン条約で国際的に商取引が規制されている数種類の爬虫類がいたとみられ、両容疑者はこれらを密輸して国内の爬虫類卸業者に密売していた疑いが持たれている。

「これは私の勝手な想像ですが」と松河さんは言った。「堀田さんがいなくなったことと何か関係があるんじゃないかと思うんです」

僕はもう一度その記事を読み返した。豊岡、爬虫類、ペット店、密売。

「確かにいくつか気になるところはありますが——どうでしょう、それは考えすぎじゃないですか？ 堀田さんが密輸に手を貸すっていうのはちよっと」

「ええ、私も手を貸しているとは思っていないんです。ただ堀田さんはこういうのに巻き込まれやすいタイプに見えるので」

「巻き込まれる？」

「はい。さっきの借金の話なんかも、買い物がしたくてお金を借りたというよりは、人のためにお金を工面して行き詰まったんじゃないかって思うんです。前にその話をしてくれたときに、何となくそういう話し方をしていたような気がするのです」

んん、と僕は腕を組んで唸った。

「借金とこの密輸がどう繋がるのかはわかりませんが、例えまったく関係がなかったとしても、堀田さんがここにいられなくなった理由とこの密輸のニュースはどうしても無関係のような気がしないんです」

そうは言われても、どう言葉を返していいのかがわからなかった。そんなことがあるわけがないと思う。でもその一方で、堀田さんがここへ戻ってくるつもりがないとなると、

借金や密輸の話を抜きにしても、『トーマスをどうすればいいのか』という具体的な問題が残る。

僕が黙って考え事をしていると、松河さんが「ごめんなさい」と小声で呟いた。

「この記事が新聞に載ったのはいつですか？」

「今月の12日です」

「というところ——堀田さんがいなくなるちようど2週間前ですね。タイミングは合っていると思えなくもない」

「はい」

「でもどうしてトーマスをうちに？ はじめから連れて行く気がないのなら、それこそペット屋に売るなり預けるなり、他に方法はあるような気がしますけど。赤の他人に預けたっていうのが気になりますね」

「そういえば」と松河さんは言った。「マンションの契約はどうしたんでしょう。急に出ていくにしても、それなりに手続きがあるはずですよ。電話して済むような話でもないですし。それに家の中には荷物や家具があるでしょう？」

確かにその通りだ。周到に準備していたとすれば、トーマスをあわてて僕に預けに来るはずがない。それに引越しの準備をしていれば真下に住んでいる僕が気づかないはずがない。僕はほとんどずっと家において、車の音しか聞こえてこないような静かな部屋でじっとしていたのだから。覚えている限りでは上の階で誰かが生活をしているような音はまったくと言っていいくらい聞かなかった。そう、まるでそこに誰も住んでいないように。

「明日、不動産屋に行ってみましょうか」と僕は言った。「事情を話せば何か教えてくれるかもしれない」

「事情？」

「上に住んでいる人からものを預かっているんだけど取りに来ないとか、そういう話をすればいいんじゃないですかね」

「ああ——そういうことですか、びっくりした。密輸の話をするのかと思いました」

「まさか」と言っただけは笑った。松河さんは恥ずかしそうにうつむいて顔を赤くした。「不動産屋が驚いてひっくり返りますよ」

「そうですよね」と言っただけ松河さんは笑った。

僕はサーバーに残っていたコーヒーを自分のカップに少し足して、残りは松河さんのカップに注いだ。

「でもこれ以上何を考えてもダメみたいですね、想像ばかり膨らんで」

「はい」と松河さんはカップに口をつけたまま言った。

そのとき、ごくごくそっとトーマスが物音を立てた。こちら側の壁に左足をつけて妙な格好で静止している。僕はふと、堀田さんが本当にトーマスのことを大事にしていたのだろうかということを考えた。第一に、大事にしていた割にはケージがお粗末だ。照明や保温

器具も、最小装備と言わざるを得ない。エサもこれでは十分ではない。まあそれはいい。お金がなかった、そういうことにしよう。でも本当に大事なペットなら、誰かに預けると決めたときに一番に考えることは、できるだけ大事に扱ってくれる人を探すことだ。ペット屋がお金がかかるとすれば、その愛好会や、知り合いや家族の中にだって預かってくれる人はいるだろう。少なくとも見ず知らずのマンションの住人に預けるよりはましだ。下手な世話をされて死なせるくらいなら、確実に世話をしてくれるペット屋に譲るほうがいいと考えるほうが自然だし、そういうペット屋は時間をかければ見つかるはずだ。でも堀田さんはなぜかそういう努力をせずに、場当たりに僕にトーマスを預けたような気がしてならない。

「松河さん」

「はい」

「もう少し話を聞いてもいいですか？ ご飯でも食べながら」

僕は夕食の場所にパソコンデスクを買った家具屋の向かいのレストランを選んだ。一度だけ入ったことがあるが、料理は大したことはなかった。もう一度食べに行きたいとは思わなかったが、前を通りがかったときにいつも店内がすいていたので、少々内密な話をするには向いているなと思っていたのだ。何でも目をつけておくと役に立つものだ。

僕はビールを頼み、松河さんはグラスワインを注文した。あまりお腹がすいていたわけではなかったが、メニューを上から下まで読んでいる間に無性にパスタが食べたくなった。二種類しかないパスタのうち、僕はクリームソースのスパゲッティを、松河さんはペンネ・アラビアータをとった。

話は僕の自己紹介から始まった。出身地や大学の専攻の話、家族構成の話、最近観た映画の話、最近読んだ本の話、好きな食べ物の話。誰に話しても差し障りのない話だ。ついでに平凡だった。主人公が僕でなくてもいいような話だとも言える。ただし、恋愛の話は無意識のうちに避けた。あるいは僕はとても意識をしていたのかもしれない。話が終わるころにパスタができあがったので、パスタの味の話しながらパスタを食べた。食べ終わると今度は松河さんの番だった。僕はビールを飲みながら話を聞いた。

松河さんは愛媛県生まれ。松山市内の中堅食品メーカーの製粉工場で働いていた父親と、九州から出てきて大学に通っていた母親の間に生まれた。兄弟はいない。彼女が生まれてすぐに、家族は父親の仕事の都合で宇和島市郊外の小さな町に引っ越した。どこを見渡しても漁師と農家しかないような小さな海沿いの町だった。彼女が宇和島市内の短期大学を卒業すると同時に、家族は再び父親の仕事の都合で転勤することになった。転勤先は豊岡だった。彼女はちょうど就職先を探していた時期だったので、両親についていくことを選んだ。長い間住んだ地元を離れることにもそれほど抵抗はなく、むしろ人口の多い豊岡

に移ることに少なからず希望を抱いていた。彼女はすぐに不動産屋の事務の仕事に就き、小さなアパートで一人暮らしを始めた。一人暮らしをすることは学生時代からの夢だった。親元にいるのが嫌だったというわけではなく、自分だけの時間や空間を好きなように使うことに憧れていたのだ。車の免許を取るために貯めていたお金は、保証金と1ヶ月分の家賃の前払いでなくなった。給料から家賃と生活費を差し引いた残りをうまく使って彼女は家具を少しずつ買い揃え、部屋が自分の好きな色に染まっていくことに喜びを覚えた。町にたった一つだけある映画館が新作を上映するときにはどんなつまらない映画でも観に行き(前に住んでいた町には映画館はひとつもなかった)、週末にはビデオを借りてきてチョコレートを食べながら家で観た。去年の夏にはじめてDVDプレイヤーを買って、借りるものがビデオからDVDに変わった。豊岡に住み始めた時点ではもちろん彼女には知り合いが一人もいなかったもので、会社の同僚の知り合いを紹介してもらって同年代の同性の友人も何人かできた。ときどき彼女たちと外食をすることもあった。おそらくはごくごく一般的な、20代前半の庶民的女性の生活だと言えるだろう。特別美人というわけでもなく、特別変わった仕事をしているわけでもない。趣味もいたって普通。彼女自身、自分には何も特別変わったところはないと思っているのだろう。それは会話の端々に伺える。謙遜でも何でも無い。それは事実なのだ。ところが昨年の10月に、彼女に転機が訪れる。トカゲと名づけられた巨大な台風が偶然にも彼女の住んでいる町のそばを通り過ぎ、彼女のアパートをなぎ倒し、こつこつと買い揃えた家具を破壊し、実家の屋根を半分吹き飛ばして床上まで浸水させ、職場のテナントを再起不能にし、車の中に閉じ込められた老人を助けようとした父親の命を奪った。すべてはたった一晩のうちに起こった。彼女に残されたのは、50になったばかりの母親と水浸しの家と使い物にならなくなった車が一台だけだった。彼女は文字通り絶望の淵に立たされた。

彼女はその話をまるでおとぎ話のように語った。あるとき、あるところに起こった、ある不思議なお話。本当に不思議ですよ。そういう話し方だった。感情移入をさせない冷徹な金網のようなものを、彼女はひとつひとつの言葉の周りに張り巡らせていた。話し終わると、彼女はグラスに残っていた赤色の液体を、ぱたりと本を閉じるみたいに飲み干した。

「随分昔のような気がします」と彼女は言った。さっきまでとは別人のような温かい話し方だった。その一言には現実味があった。僕は黙ってうなずいた。

店を出たのは9時過ぎだった。僕たちは国道沿いを並んで歩いた。マンションの前まで来たところで、松河さんが「そういえば堀田さんの話、全然しませんでしたね」と言った。「前置きが必要だったんですからしょうがないですよ」と僕は言った。彼女は「そうですね」と呟くように言った。

エレベーターは最上階にいた。僕はボタンを押してから、この前に郵便受けを開けたの

がいつだったかを思い出そうとした。思い出したのはエレベーターが2階まで降りてきたところだった。僕は松河さんとエレベーターの中で会ったときに、自分が郵便物を持っていたことを思い出した。ほんの3時間前の話だ。3時間前に郵便物を取り出した。そしてこの時間に配達があるわけがない。したがって郵便受けの中に郵便物はない。そこまですり着くのに少し時間がかかった。

「どうしたんですか？」と松河さんが僕に話しかけた。

「考え事してたんです」と僕は言った。「郵便物についてちょっと」

「さっきはかなり悩みました。話しかけるかどうか」

「エレベーターの中で？」

「はい。知らない男の人と一緒にエレベーターの中にいるだけで緊張するのに、話しかけるなんて」

「しかも自分の住んでいるところじゃない」

「はい。本当に心臓の音が聞こえるかと思うくらい緊張しました。聞こえませんでした？」  
「あいにく」と僕は言った。

でも今度は僕が緊張する番だった。僕は彼女にひとつ聞かなければならないことがあった。このあとどうするのかということについて。

はじめはどこかにホテルを取っているものと勝手に思い込んでいた。でもそうではなさそうだとすることに気がついた。彼女はポストンバッグを持っている。財布や化粧品だけを入れているのではなさそうだ。もしすでにホテルにチェックインしているなら、あんな荷物を持って歩き回ったりはしない。そして彼女は間違いなく電車を使ってここまで来ている。この町へ来るには電車か車を使うしかなく、彼女は車の免許を持っていない。駅の周りにはビジネスホテルがいくつかあるが、駅とこのマンションの間にはホテルなんてひとつもない。ということは、彼女はまだ今夜の宿を決めていない。

——いや違う。彼女はもともと堀田さんに会いに来たのだ。堀田さんがまだここにいると思って来たのだ。堀田さんを何かから守るため、あるいは引き止めるため。しかし堀田さんはいなかった。もし堀田さんがいれば、彼女は堀田さんの部屋で寝たのだろう。ポストンバッグが意味するところはそれだ。

玄関の電気がつけっぱなしだった。かすかにコーヒーの匂いが漂っていた。

僕は靴を脱いで部屋に上がると、振り返って「どうぞ」と言った。彼女は後ろ向きで靴を脱いで、それを手できちんと揃えた。

窓際でトーマスがごぞごぞと落ち着きのない音を立てているのを聞いて、エサをやっていないことを思い出した。三分の一ほど減ったイグアナフードを出してケージの蓋を開けると、トーマスが首を伸ばしてこっちを見ていた。いつもより少しだけ愛想よく見える。

「ごめんよ、忘れてた」

ビンを横にしてイグアナフードをぱらぱらと適当に落とすと、トーマスは体に近いもの

から順番に口にくわえていった。蓋を開けてライトを取り付け、パチンとスイッチを入れた。窓際がぼんやりと明るくなった。

その様子をすぐ後ろで覗き込むようにして見ていた松河さんが言った。

「どうですか？ トカゲを飼うのは」

「悪くないですね」と僕は答えた。「なかなかかわいいですよ。この間くしゃみをするのを見ました」

「本当ですか？」と松河さんが言った。

「はい。たぶんくしゃみだろうっていうだけですけどね」

「堀田さんもいい人を見つけましたね」

「さあ、どうでしょうね。そうだといいいんですが」と僕は言った。「堀田さん、本当に戻って来ないと思います？」

松河さんは少し悩んでから「はい。そんな気がします」ときっぱりと言った。

「そうだ、堀田さんに電話してみますか？ 今日の朝一度掛けたきりなんです」

「そうですね」

僕は冷蔵庫に貼り付けてあったメモを見ながら電話を掛けた。呼び出し音が三回鳴ったあとで留守番電話に切り替わった。僕は電話を切った。

「だめです」

「その番号——私が持っているのと違いますね」

「え、本当ですか？」

「ちょっと待ってください、私も掛けてみます」

松河さんは持っていた携帯電話で電話を掛けた。しばらくして彼女は首を横に振った。

「つかまりそうにないですね」と僕は言った。

「はい——」

「でも電話をして下さいって言ったのは堀田さんの方ですよ」

「たぶん留守番電話のメッセージは聞いているんだと思います。話さないだけで」

「まいったな」

そのとき表の廊下を誰かが歩く音が聞こえた。ハイヒールの音。足音は左から右へ抜け、やがて小さくなって消えた。彼女もその音に耳を傾けているようだった。僕の方が先に音を追うのをあきらめたようだ。

「ひとつ聞いてもいいですか？」と僕は言った。「今日はどうするんですか？」

松河さんがこつちを見る。まつ毛の下で丸い目が小さく動いている。

「私も困ってるんです。こんな予定ではなかったのです」

「堀田さんがまだいると思ってたんですよ」

「はい」

「宿も決めてないってことですよね」

「はい」

僕は時計を見た。9時50分。

「駅前にビジネスホテルがありますけど、電話してみますか？」

僕は堀田さん宛てに届いた駅前のホテルのダイレクトメールを思い出して、紙袋の底のほうからそのダイレクトメールを取り出した。封筒の裏にちゃんと住所と電話番号が書いてあった。

それを松河さんに渡そうと差し出すと、彼女は受け取ったものの、どことなく気の乗らない様子だった。僕は言った。

「失礼なこと聞きますけど、もしかしてあんまりお金を持ってないんじゃないですか？」

松河さんは小さく二回うなずいた。

「何だ、そういうことなら早く言ってくればいいのに」と僕は言った。「うちに泊まっていていいですよ。もちろん松河さんが平気なら、ですけど。でも約束します。僕は絶対に妙な考えを起こしたりはしませんから。あんまり器用じゃないので、そういうところは」

「本当に構いませんか？」

「どうぞ遠慮なく」

「すみません、恥ずかしい話で」

その時点で僕たちはようやくお互いに探り合うのをやめた。共有できるもの、あるいはすでに共有してしまっているものがある程度確認しあったのだと思う。彼女にはお金がない。僕には部屋がある。堀田さんが共通項として存在し、そのことで同じように気を揉んでいる。すぐ隣にトーマスがいる。二人とも酒が飲める。そして何より僕たちは二十代前半の平凡な大都市生活者という点で至極似通っている。

僕は松河さんにシャワーをすすめ、その間にビールとワインを買いに出かけることにした。女性が使うようなシャンプーはないけれど、ドライヤーとタオルはいくら使っても構わないと言いつつ部屋を出た。階段を下りながら時計を見ると、10時ちょうどだった。20分後に戻ればいいだろう。

時間を使うために、一番近いコンビニの前を通り過ぎて、国道沿いをさらに4ブロックほど歩いた。コンビニの青いネオンの下で高校生らしき男の子が三人並んで座ってタバコを吸っていた。春休みももうすぐ終わる。

店に入るとほとんど迷わずにビールの六本パックと1500円の赤ワインとチーズとスナック菓子二つをカゴに入れてレジに向かう。勢いでレジの横にあった肉まんを二つ買ってみる。食べたことはないが美味そうに見えた。

マンションに着いたのは10時半だった。予定よりも時間がかかってしまった。部屋に戻ると、案の定松河さんが心配そうに「おかえりなさい」と言っただけで出てきた。僕は適当な理由を言っただけで謝った。買ってきたものをテーブルの上に広げていると、松河さんがくすくすと笑い出した。

「学生みたいです。肉まんとかスナックとか」

「つい2週間前までは学生でしたから」と僕は弁解した。

僕たちはキッチンのテーブルに向かい合って座って話をした。レストランでの話の続きみたいなものだった。僕はさつき飛ばした恋愛の話を付け加え、将来の仕事や夢の話を未完成の人生哲学を交えながら語った。堀田さんに出会ってから本屋に行って児童書コーナーで図鑑を立ち読みしたこと、葉書を見てペット屋に行ったこと、買ったパソコンがまだ届かないこと、そのせいでパソコンデスクだけがリビングに置いてあること、そんなことも細かく描写した。

僕がある程度満足するまで話し終わると、彼女はさつきよりもさらに具体的に台風が町を襲ってから1ヶ月の間に起こったことを話した。台風が去った後、雑居ビルの中の避難所で雨音を聞いただけで怖くなると言って泣き続けた老女と添い寝したこと。地元の高校生が被災家屋の泥かきや畳の張り替えを手伝ってくれたこと。浸水の被害に遭った家庭に床下乾燥剤を法外な値段で売りつけたり、屋根の修繕をしようと市職員の職員の装う悪徳業者が町中に現れたこと。11月になって1週間が過ぎ、ようやく仮設住宅への入居手続きが始まったこと。そのようにしてその1ヶ月の間の出来事は、結果的にはあるけれど彼女の人生にとつてとても大きな意味を持つことになった。彼女の話し方には、その意味について誰かに反復して語ることで、あるいは自らに語りかけることで、見えないなりにも何かの形に残しておきたいという意味が感じられた。そのために記憶を取り出す部分の機能は研ぎ澄まされ、言葉の使い方は巧妙になり、そして語られた言葉は語りかけた相手の心を強く揺さぶった。

それから彼女は亡くなった父親の話も避けなかった。台風の後の出来事をよく覚えていたように、彼女は父親のことについてとてもよく覚えていた。彼女が生まれる前のことも、誰かから聞いた話だとは思えないくらいに克明に描写した。まるでその場にいたのかと思うほどだった。そして彼女がこの世に生を受けてからのことも、父親に関することはよく覚えていた。彼女は父親について知っていることや覚えていることを滔々と話し続けた。台風の記憶が鮮明であったように、父親の記憶もまた鮮明だった。でも悲しいことに、台風の話には「その後」があったけれど、父親の話には「その後」がなかった。

そして彼女の話は僕の体を通り抜けた。台風の話も、父親の話も、みんな僕の中を通過した。部分的に留まりはしたものの、それは階段の踊り場で足踏みをするくらいの時間でしかなかった。とても不思議だった。僕はその話のひとつひとつ、一語一語に深く聞き入った。それは僕の中で響き、心は揺れ動いた。でも僕の心には何も残らなかった。本当に不思議だった。でも僕はその理由をちゃんとわかっていた。それは彼女の話がとても客観的だったからだ。話の主人公は当然彼女だった。けれども彼女は話の中にはいなかった。彼女はその話を化粧箱に詰めて、誰かにそっと差し出しているだけだった。彼女は箱の中



にみんな閉じ込めてしまっていた。だから彼女は泣かなかったし、笑わなかったし、怒りもしなかった。彼女が語った言葉は、どれも過ぎていった時間の客観的な回顧にすぎなかった。主人公は彼女でなくてもよかったのだ。その点では僕が話したことで彼女が話したことの間には大した違いがなかったと言えるかもしれない。

でも人間は何かを語りがたがる。語らなければいけないときがある。そういうときに話すべき相手がいれば、人は語りかける。それが相手にとってどのような意味を持つまいと、残ろうと残らまいと。そのとき僕と松河さんの間で語られたことは、そういうことだったのだ。あるいは相手がトカゲであつてもよかったのかもしれない。言葉はトカゲの体を通り抜け、言葉は影になつて消える。

「堀田さんは本当にトカゲが好きなんだと思いますか？」

僕は松河さんに質問してみた。はじめからほんの少しだけ疑問に思っていたことだ。松河さんはケージにちらつと目をやってから言った。

「前に堀田さんが言つてました。昔からトカゲは神秘的な動物として色々な寓話の中に登場したそうです。人間はトカゲに象徴的なイメージを見出してきたと」

僕は、わかります、という風にうなずいた。彼女は続けた。

『処女懐胎の寓意』という言葉があるそうです。トカゲは耳から受精して口から卵を産むと信じられていたこともあつたそうで、聖母マリアの持ち物として大事にされてきた動物だとか」

「そんなことを堀田さんが言っていたんですか？」

「はい、聖書は読まないけど、その話には共感できると」

「でもトカゲにはちゃんと雌雄があるし、交尾だつてする」

「ええ、それは堀田さんも当然わかつていたと思います」

「わかつてはいるけど、何とかその——俗信に魅力を感じたつていうことなんでしょうか」

「そうだと思います。『トカゲは神秘的な動物だ』つていうのが彼の口癖でした」

処女懐胎。聞き慣れない言葉だが意味はわかる。聖母マリアが処女でありながら妊娠してキリストを産んだというキリスト教の最も重要な教理の一つだ。確かにその話は神秘的ではある。でもそれだけでは、処女懐胎を投影しているとされるトカゲを堀田さんが好んで飼つたというところまで僕の想像力は及ばない。堀田さんはそのトカゲを安っぽいケージに入れたまま僕に預け、姿を消しているのだ。そしてこれはとても重要なことだと思うけれど、僕が思う限り、トーマスはオスのトカゲだ。

「オスですよ」と僕は唐突に聞いた。

「え？」

「トーマスの性別です。雌雄つていうのかな」

「オスです。堀田さんがはじめて飼ったオスのトカゲです」

「はじめて飼った？」

「はい。これまではずっとメスのトカゲしか飼ったことがないって」

「僕には『これまでに何匹か飼ったことがある』って言ってましたけど」

松河さんがため息をつく。

「いえ——それはたぶん嘘をついたんだと思います。堀田さんは今でもトカゲを20匹以上飼っていると言っていましたから」

「20匹？」

「はい。飼ったことがあるトカゲの数、という意味ならもともと多いでしょうね」

「それが全部メスなんですか？」

「はい」

僕は大きな勘違いをしていたようだ。堀田さんはトカゲを1匹飼っていて、それがどうしても世話でなくなったから僕に預けた。引き取りにくるつもりがなかったとしても、堀田さんの飼っているトカゲはトーマス1匹だと思っていたのだ。でも考えてみればそれは勝手な思い込みだ。20匹以上となると話は別次元になるが、少なくとも他にトカゲは飼っていないかったのか、もし飼っていたらそれはどうしたのだろうか、という疑問を持ってもよかつたはずだ。僕は眉をしかめた。

松河さんは僕と同じような表情でトーマスを見ていた。唯一のオスのトカゲ。大量のメスのトカゲに囲まれて、トーマスは何を考えていたのだろうか。そして堀田さんは何を考えていたのだろうか。

処女懐胎の寓意としての動物。

「明日不動産屋に行ってみましょう。堀田さんの部屋を見ないといけないような気がしてきました」

「そうですね」と松河さんは呟くように言った。

松河さんが歯を磨いている間、僕はクローゼットの奥から真空パックされた布団一式を取り出してリビングの床の上に敷いた。彼女がふくらんだばかりの冷たい布団に潜り込むと、僕は部屋の電気を全部消してからシャワーを浴びた。シャワーから出てくると松河さんは寝息を立てていた。水道水をコップに一杯飲むと、僕はしのび足でリビングを横切ってベッドの上に腰掛けた。ベッドからはトーマスを照らしているライトの光がほんのりと青く松河さんの寝顔を照らしているのが見える。僕は「おやすみ」といつものように天井に向かって呟いて目を閉じた。

\*

夜中に物音が聞こえて目が覚めた。まだ部屋の中は暗い。ケージのライトの薄明かりの中で、何かが丸くうずくまっている。松河さんだ。松河さんは背中を丸めて向こうを向いている。布団から出ている肩がときどきひきつるように動く。松河さんは泣いていた。僕はしばらくの間、耳を澄ませてその泣き声を聞いた。彼女は身動きひとつしなかった。ものの悲しい泣き声だった。きりきりと肺の筋肉が痛むような音だった。布団の陰になって松河さんの顔は見えない。でも肩の上あたりに、闇の中から突き出た白い耳が浮かび上がっている。その左耳はライトの光のせいで半透明に見える。透き通った外耳の内部に通っている赤い毛細血管。僕にだけ見えるその血管のイメージは、部屋の真ん中で赤く、そして薄青く脈打っている。ドクンドクンという音が僕には聞こえる。

僕はそのままの姿勢で、彼女の布団に潜り込んで肩を抱くシーンを何度も何度も想像する。肩を抱いたあと、僕は彼女の左耳をそっと舐める。毛細血管はさらに太く充血し、やがて僕の舌は彼女の耳に入り込む。

想像しているうちに僕のペニスは固くなった。途中から会社のレポートのことや入社式のことを考え始めたが、収まる気配はなかった。松河さんの泣き声はときどき止んだけれど、ふた呼吸も置くとまた同じように泣き始めた。窓の外からいつもと同じ車の音が聞こえてくる。トーマスが不安げに身動きをして砂をかき回し始める。僕の下半身はさつきからずっと硬直したままだ。女の耳、泣き声、車の音、トカゲの足音、僕のペニス。小さな空間の中で、僕にだけわかる無秩序が、秩序を持つとうともがいている。

そして僕はふとあることに思い至る。松河さんと堀田さんの関係。僕はそこへ到達することができなかった。彼女は何も語らなかった。台風や父親に関する長くて正確な話が堀田さんを固く取り囲んだ。結果的にではあるけれど、僕は何も知ることができないでいる。いや、松河さんと堀田さんの関係について、ただの一度も質問をすることができなかった。忘れていたわけではない。僕は質問のタイミングや内容についてしっかりと考えていた。ちゃんとチャンスをうかがっていた。でも何かがそれを阻んだ。

彼女の充血した左耳が笑っている。

僕は羊を数え始めた。

ヒツジガイツピキ、ヒツジガニヒキ、ヒツジガサンビキ――

100匹を超えたところで羊のリズムが狂いはじめた。200匹を超えると前後の羊がぶつかり合った。500匹を超えたあたりで羊が羊の意味を失い始め、800匹の手前あたりで羊の数を間違えた。そのころになってようやく部屋の中が落ち着き、僕はようやく眠ることができた。窓の外が白み始めていた。夜が明ける直前だった。

目が覚めると松河さんが身支度を終えて布団をたたんでいるところだった。僕は目を半分閉じたまま「おはよう」と言った。彼女はにっこりと笑って「おはようございます」と言った。昨日の夜ずっと泣いていたのが嘘のような明るい表情だった。夢だったのだろうか、と僕は一瞬考える。

トーストを焼きながら卵をゆでた。二つゆであち片方が鍋の中で割れて中身が飛び出した。僕はそれを取り出して半生のままで塩をつけて食べた。松河さんが淹れたコーヒーを二杯飲むとようやく頭がすっきりとしてきた。僕はつけっぱなしになっていたライトを消して、窓を開けた。

僕が不動産屋に行っている間、松河さんが例のペット屋に行くことになった。堀田さんについて何か覚えていた店員がいるかもしれないから、と彼女は言った。

僕たちは携帯の番号を交換してから一緒にマンションを出た。僕は交差点で松河さんと別れると、部屋を紹介してもらった駅前の不動産屋へ向かった。

駅前の通りは閑散としていた。歩道に植えてあるナンテンやキンモクセイには葉が生い茂っていたが、風に吹かれて葉が擦り合わせる音が寒々しかった。色褪せたナンテンの赤い実が道傍に落ちて踏み潰されていた。駅前の風景全体が埃をかぶったようにくすんで見えた。

不動産屋は駅前の交差点の角にあった。自動ドアの前に立つとドアが勢いよく開き、デスクに向かって事務作業をしていた若い男性がこちらを向いて「いらっしやいませ」と眠そうな顔で言った。

僕は椅子に座ると事情を説明した。ひと通り話を聞き終わると、彼は「上に住んでいる方から物を預かっていて、しばらく連絡が取れないということですね」と簡潔に話をまとめた。「そうです」と僕が答えると、彼はパソコンで何かを調べ始め、キーボードを叩きながらこちらを見ずに言った。

「いずれにしてもその方のご連絡先などはお教えできないことはご了承下さい。個人情報ですから」

「ええ、それはわかっています。ただ、もしかしたらもういらっしやらないのではないかと思います。郵便受けにはまだ名前が残っているのですが」

「ええと——そうですね、その方は今月のはじめにすでに退去されていて、そのときに鍵も返却なさっています。手続きもすべて完了しています。ちょっと待ってくださいね、いまオーナーさんに確認を取りますから」そう言って彼はダイヤルを回した。電話はすぐに繋がったようだ。

彼はまずはじめに、最近の住宅事情についてやどうでもいいような世間話をしてから、ようやく堀田さんの話を始めた。終始腰の低い丁寧な話し方だった。最後にもかといふくらいに札を言って電話を切った。

「すごくいい方なんですよ、このオーナーさんは」と彼は言った。「オーナーさんがおっしゃるには、今日の夕方、ちょうどその部屋のことでもマンションにいらっしゃるそうなので、そのときにお部屋をご覧いただくことくらいはできるとおっしゃっていました。部屋のクーリーニングは随分前に終わっているのですが、鍵のつけ替えをにしに行かれるそうです。5時ごろに来ていただければいいのですが」

僕は「わかりました。どうもありがとうございます」と言って軽く頭を下げってから不動産屋を出た。彼は椅子から立ち上がって「またお越し下さい」と言って深く頭を下げた。「さて、弱ったな」と僕は呟いた。これで堀田さんが戻ってこないことは決定的になった。

時計を見ると待ち合わせの時間までまだ1時間近くあったので、僕は駅ビルの中の喫茶店に入って雑誌を読みながら時間を潰した。途中で一度松河さんの携帯電話を鳴らしたけれど、すぐに留守番電話に切り替わった。

2時少し前になつて松河さんから電話がかかってきた。もうすぐで駅前に着くということだった。僕は喫茶店を出て、改札に向かった。改札に着くとちょうど松河さんが向こうからやつてくるのが見えた。あまり表情は明るくない。大した成果はなかったのだろう。「どうでした？」と僕は聞いた。

「ペット屋の店員にナンパされました。彼氏いるんですかって」松河さんは落ち込んだ様子を隠さない。「そういうのに本当、うんざりしてるんです」

「こつちもダメです。堀田さん、もう部屋を引き払っているみたいで」

彼女は「最悪ですね」と力なく言った。

「でもちょっとだけいいニュースがあります」と僕は言った。

「何ですか？」

「堀田さんの部屋のオーナーが今日マンションに来るらしくて、部屋を見せてくれるそうです」

「本当ですか？」

「ええ、偶然というか何というか。まあ見てもどうなるというわけではないんですが」

「そうですね。でも諦めが付きまず」

それから僕たちは駅ビルの中の定食屋で1000円のヒレカツ定食を食べてからマンションに戻った。彼女は断ったけれど、僕は二人分の勘定を支払った。僕はつい勢いで「このくらいしかできないですから」と大袈裟な台詞を言ってから少し後悔した。彼女は気まずそうに笑った。

エレベーターに乗る前に郵便受けを開けると、いつものように郵便受けが一杯だった。取り出すのもうんざりするくらい量の量だ。

「転送届けを出してないんですね」と松河さんが言った。

「松河さんからの手紙を受け取るためにやらなかったんじゃないかな」と僕は言った。「そういうえあの手紙、どうします？」

「持って帰ります。堀田さんが読むことはもうないでしょうし」

届いた郵便物はすべて紙袋行きだった。一応ひとつひとつチェックはしたけれど、すべてダイレクトメールだった。もちろん九州から来たものはない。松河さんがここにいるというこの状況を堀田さんは想像できなかったのだろう。

5時になるのを待って、僕と松河さんは5階の堀田さんの部屋を訪れた。表札には名前はなく、インターフォンを鳴らしてみただけで返事はない。ドアの横に透明のビニール傘が二本立てかけてあった。

外はもう暗くなり始めている。廊下から外を見ても、4階の眺めとほとんど変わらない。マンションの裏手には縦横にびっしりと家が詰め込まれた土地が広がっていて、そこから同じような色のマンションがいくつも突き出していた。

エレベーターが開く音がしたので振り返ると、少し腰の曲がった老人が軽く足を引きずりながらこちらに歩いてきた。

「あんた方かな、部屋が見たいというのは」と老人はかれた声で言った。

「はい」と僕が返事をする、老人は「構わんよ、ちょうどよかったんじゃ」と少しどもりながら呟いて、ポケットから鍵をじゃらじゃらと取り出した。さらに老人は「すまんが開けてくれんかな」と言っただけのうちのひとつを選び、僕に手渡した。鍵の見た目は僕が持っているものと同じだ。僕はそれを差し込んで左に一回転させてからドアを開ける。老人のあとに続いて僕が部屋に入り、最後に松河さんがドアを閉める。

「おい、こりゃあなんじゃ」先に部屋に上がった老人がリビングの手前で声を上げる。僕もあわてて靴を脱いで部屋に上がる。

リビングの前で真っ先に目に入ってきたのは青いシートだった。そしてその上に積み上がった四角いガラスの箱。

それは水槽だった。水槽の上に水槽、また水槽。そこにあったのは文字通り水槽の山だった。青いシートは工事現場にあるような大きな一枚のブルーシートで、それがリビングの床の上面に敷いてある。そしてその上に、水槽がきれいに積み重ねてあった。大きさも形もばらばら。数にすれば20から30といったところだろうか。隣にいた松河さんも声が出ない様子でその光景を眺めていた。

水槽は全部空っぽだった。中には何もない。ヒーターもないしライトもない。砂も敷いていない。もちろん動物もない。ガラスの表面は部屋の中の様子が映りこむくらいぴかぴかに輝いている。水槽は縦横に交互に積み重ねてあって、一番上の水槽は床から2メートルくらいの高さにある。

「まいったのう——」老人はそう呟いて、歯をかちかちと噛み合せた。「誰がこんなもん持ってきたんじゃ？」

僕は老人に断って水槽を上の方から順番に下ろしていった。小さな地震でも来れば水槽の山は簡単に崩れてしまうだろう。かなり危険な状態だ。水槽を実際に手で持ってみると、思ったよりもずっしりと重い。ガラスの表面に指先が吸い付く感触がする。新品の水槽をさらに磨き上げたような感じだ。正面のガラスが引き戸になっていて、水槽を持つとカタカタと音を立ててガラス戸が小さく動く。上部の蓋は黒いプラスチックでメッシュ状に穴が空いている。水槽を全部下ろしてしまうと、僕は老人に聞いた。

「ここに住んでいた方と知り合いだったんです。彼は今月のはじめに出て行ったと聞きましたけど」

すると老人は首を傾げて口をもごもごと動かして言った。

「そうじゃ。いつだったかのう、この部屋を掃除したのは。いつも頼んどる業者に頼んだんじゃ」

「そのときはここには来られたんですか？」今度は松河さんが聞いた。

「もちろん来たわい。業者は信用しとるが、作業員は変わるからの」老人は首を斜め上に向けて目を細めた。「いや、実はそのときに鍵も替えるつもりじゃったんじゃが、うっかり忘れておつてな、そいで今日来たんじゃ。鍵屋がもうすぐ来るわい」

「ということは、そのクリーニングの日から今日までは古い鍵のままここに入れたということなんですね」

「鍵はもらっとったんじゃがのう——」そう言って老人はまた歯をかちかちと噛み合せ、黙り込んでしまった。

僕は松河さんと顔を見合わせた。同じことを考えているようだった。合鍵はいくらでも作れる。だからこそ住民が変わるときには鍵を念のために交換するのだ。堀田さんは古い鍵を使ってこの部屋に出入りしていた。あの日、僕にトーマスを預けたときも。

僕は水槽の周りをぐるっと歩いてみた。水槽は無表情な積み木のように転がっている。同じメーカーの、同じタイプの水槽だ。数えてみると26個あった。よく見ると水槽の底のところどころ砂粒のようなものが張り付いている。砂のついた水槽を洗って乾かした状態に見える。新品ではないことは確かだった。中には乾ききっていないものもあって、ガラスの内側にまだ水滴が残っていた。

僕はここで飼われていたメスのトカゲの姿を思い浮かべた。彼女たちはここで堀田さんに手厚く世話をされ、十分にエサを与えられていたのだろう。おそらくはイグアナフードではなく、もっとちゃんとしたものを。水を与えられ、管理された温度条件のもとで紫外線をたっぷり浴びて。

僕は警察に電話することも提案してみたが、老人は首を横に振った。ゴミ処理業者を呼んで引き取らせるしかないだろうと老人は力なく言った。トーマスのためにひとつ引き取

ろうかとも思ったが、すぐに思い直した。結局僕たちにできることは何もなかった。別れ際に老人が言った。

「長くやつとるとな、色んなものを置いていくやつがおる。前に墓石を置いていきおったねえちゃんがおったわ。まあそれよりはましじゃの。あんた、もしその知り合いに会うたら、悪いが全部捨てたと言うとくれ。でもな、あんまり責めんでやつてくれ。トカゲがしつぽを置いていったようなもんじゃからの」

\*

「色々とお世話になりました」そう言つて松河さんはポストンバッグを手に持ったままお辞儀をした。

「本当に帰るんですか？」

「はい、これ以上わがままは言えませんか」

「別にいいんですよ、僕は」

「ありがとうございます。でも、帰ります」

「そうですか——」

「すいません」

「そんな、謝らなくつても——あ、そうだ、もう一回堀田さんに電話してみますか？」

「そうですね」

僕は堀田さんのメモを手にとって、数字をゆくりと追いながらボタンを押した。電話は短い空白のあとで聞き覚えのあるメッセージに変わった。メッセージが二回繰り返されたところで僕は電話を切った。

「電話番号、使えなくなつたみたいです」と僕は言った。松河さんは目を閉じてため息をついてから「そんな気がしてたんです」と低い声で呟いた。僕は電話を掛けたことを後悔した。

駅まで送るといふ僕の提案を彼女は丁寧断った。一人で歩きたいんです、と彼女は言った。彼女は玄関先で僕に別れを告げた。「何かあったらいつでも電話してください」と僕は言った。「ありがとうございます」と言つて彼女はもう一度頭を下げた。エレベーターに乗るときに横顔が少しだけ見えたけれど、彼女はこつちを見なかった。

僕は部屋に戻るとリビングからベランダに出て、松河さんの姿を探した。しばらくして松河さんがマンションから出てきたかと思うと、その小さな影は国道沿いの歩道に迷うことなく移動して、やがて闇の中に消えた。



夜が更けて日付が変わるまで、僕はリビングのテーブルにじっと座ったまま耳を澄ませてインターフォンが鳴るのを待った。エレベーターが止まって松河さんがここへ戻ってくるところを想像しながら。でも聞こえてくるのはいつもの車の音だけだった。トーマスがおとなしかったせいで、部屋の中はいつもより静かだった。キッチンの足元に昨日飲んだビールの空き缶やワインのボトルが並んでいるのを見ると、自然と松河さんのことを思い出した。

僕はケージの前に椅子を置いて、トーマスを上から眺めた。ケージの中はとても狭い。トーマスは臉をぱちぱちと動かしながらじっと前を向いていた。

急にトーマスのことが不憫に思えてくる。トーマスを逃がしてやりたいと思う。少なくとも早く大きな水槽を買って移してやりたい。コオロギも与えてやりたい。小松菜もたらふく食わせてやりたい。

僕はトーマスに約束をする。

「もっといいところに移してやるからな」

12時が過ぎたところで僕は立ち上がり、熱いシャワーを浴びた。バスルームを出ると僕はそのままベッドに潜り込むと、天井を向いて目を閉じた。空腹を感じ、トーマスにエサをやっていないことを思い出した。さつきやればよかったと少し後悔する。でもどうしても起き上がる気がしなかった。「トーマス、悪いけど明日な」と僕は呟く。それから僕はもうひとつ大事なことを忘れたことに気がついた。

## 6日目、そして入社式の朝

次の日の朝一番に松河さんに電話を掛けた。松河さんは出なかった。僕は留守番電話に「すいません、手紙を返すのを忘れました。どうしたらいいですか？」と吹き込んだ。さらに何か言おうと考えているうちにピーという音がして電話が切れた。

僕はコーヒーを飲んでパンをかじりながらトーマスにエサをやった。トーマスはいつもの倍くらい量のイグアナフードと、皮のついたリングを半分ぺろっと平らげた。容器に水を入れてやるとトーマスは太い舌を出してちやぷちやぷと水を舐めた。食べたあと、トーマスの体がひとまわり大きくなったような気がした。

明日の入社式に備え、クローゼットを開けてスーツとシャツとネクタイが揃っていることを確認した。靴箱も開けて靴が十分磨いてあることも確認した。電車の時刻表を広げ、明日の朝家を出る時間を決めた。カバンも用意した。残ったのはレポートだった。もうや

るしかないぞ、と僕は自分に言い聞かせ、キッチンのテーブルに座ってペンを持った。

レポートを書いている間、上の階に人が出入りしている気配があった。水槽を業者が運び出しているのだろう。ガラス戸がカタカタと揺れるあの音がひっきりなしに聞こえてきた。業者の人数が複数だということもわかる。まるで引越しをしているような雰囲気だった。作業は1時間ほどで終わった。最後にドアに鍵を掛ける音まで聞こえてきた。

レポートの体裁が整ったのは夕方前だった。内容はお粗末で、胸を張れるようなものではなかった。でも僕はそれ以上レポートに時間を費やしたくなかった。いままでに味わったことのない種類の虚脱感が僕の体を取り巻いていた。何か大事なものを失ったような感触が体の中のどこから僕を責めていた。けれどもそれが具体的に何なのかはわからない。すると急にフトアゴヒゲトカゲの学名が気になり始めた。どのアルファベットから始まるかとも思い出せない。Lだったか、Tだったか――。僕はペンをテーブルの上に置いて深呼吸をしてから、椅子に深く座って体を沈めた。そのとき右足が足元に置いてあった紙袋に当たった。僕はその足で紙袋をたぐりよせ、紙袋中の一番上にあった黄色い封筒をつまみ上げた。堀田さん宛ての松河さんの手紙。大分中央郵便局の消印。封筒を窓の光に透かしてみる。中身は前と変わっていない。便箋が一枚折って入れているのが見える。短い手紙だ。

僕はそれを元の場所に戻すと、立ち上がって大きく背伸びをした。レポートを封筒に入れてカバンの中に片付け、開けていた窓を全部閉めてまわる。それから松河さんが寝ていたあたりに立って、リビングの中をぐるりと見渡してみる。明日から会社が始まるというのに、部屋の中は1週間前とほとんど変わっていない。一人掛けのソファはずっとそのままの位置にあるし、パソコンデスクは空のままだ。相変わらずテレビもなく、ラジオもCDもない。封をしたままのダンボール箱と読み終わった本がばらばらと床の上に転がっている。フローリングの床の上にはうっすらと埃が浮いている。

堀田さんの部屋の26個の水槽。そこで飼われていたであろうメスのトカゲ。でもそのときはもうあの場所は堀田さんの家ではなかった。僕が引越してきた頃には、あの部屋にはもうトカゲはいなかったはずだ。鍵を使って堀田さんは無人の部屋に忍び込み、倉庫のようにして使っていた。おそらくは空になった水槽を置く場所として。そして26匹、あるいはそれ以上の数のトカゲたちはすでにどこかに移されていた。ではどうして堀田さんは僕にトーマスを預けたのだろうか。他のメスのトカゲと一緒にしなかったのはどうしてなのだろうか。

「なあトーマス、お前はここに来る前どこにいたんだ？」

翌朝、僕は目覚まし時計の鳴る1時間前に目が覚めた。目覚めはよかった。頭の中にもやもやとしたものは残っていたけれど、シャワーを浴びるとすぐにどこかへ吹き飛んだ。

僕は髪を念入りに乾かしてから、いつものようにコーヒーマーカーをセットした。フィルターをセットして、粉をスプーンに三杯入れる。サーバーの4の目盛まで水を入れ、それをコーヒーマーカーの中に注ぐ。そこまでやってから、僕は部屋の中の異変に気づく。いつもと何かが違う。何か手順が違ったのだろうか。いつも朝はシャワーを浴びない。そのせいだろう。いや、髪をゆっくりと乾かしすぎたせいだろうか。コーヒーマーカーの粉よりも先に水を入れるべきだったか。いや、違う。視線が窓に向かう。窓がほんの少しだけ開いている。ケージにとりつけてあるライトが消えている。いや、ライトが少し斜めにゆがんでいる。

僕はトーマスに近づいた。

「おはようトーマス」そう言つてストッパーを外そうと蓋の左右を持つ。ストッパーがいつもの場所になかった。ストッパーが外れている。

僕はあわてて蓋を持ち上げた。

ケージの中にトーマスはいなかった。

それから1時間、入社式に間に合うぎりぎりの時間まで僕はトーマスを探し回った。けれどもトーマスは見つからなかった。マンションの壁にも、駐輪場にも、植木の中にも、駐車場の車の下にもトーマスはいなかった。マンションの周りもくまなく探しまわったけれど、トーマスの姿はどこにもなかった。

入社式の間も僕はずっと昨日の夜のことばかり考えていた。昨日の夜、僕は何をしていたのだろう。窓を開けたまま寝たのだろうか。ストッパーを掛けるのを忘れたのだろうか。いや、それとも誰かが僕の部屋に忍び込んでトーマスを逃がしたのだろうか。トーマスは何らかの方法でケージの蓋を開け、たまたま開いていた窓から出てマンションの壁を這って地上に下りたのだろうか。いや、ケージの蓋はもともと開いていたのだろうか――

入社式が終わると新入社員全員で各部署を回り、これから上司となる人物を20人以上紹介された。小さなビルの中を歩き回り、何度もエレベーターに乗った。その日聞いた話はすべて右から左へと抜けていった。体も頭も思うように動かなかった。

マンションに着いたのは9時過ぎだった。僕は真つ直ぐに郵便受けに向かった。昨日は郵便受けを開けなかったから、郵便受けが一杯になっているのは間違いないだろう。

右に6、左に8。いつものようにダイヤルを回す。しかし扉が開かない。はみ出るくらい郵便物が溜まっているのが外からでも見える。僕はもう一度ダイヤルをはじめから回す。右に6、左に8。やっぱり扉が開かない。鍵を取り替えたのと同時に郵便受けの開け

方も変更されたのだ。考えてみれば当然だったが、なぜか堀田さんの名前はまだそのままになっている。あの老人が歯をがちかちと噛み合せる姿が思い浮かぶ。

僕は自分の郵便受けを開けた。めずらしく何かが入っている。ひとつは市役所からの封筒で、もうひとつは半分に折りたたんだ水色のルーズリーフ。ルーズリーフの左上の隅に『本当にありがとうございました。これから豊岡に行ってみます』と書いてあった。その続きを書こうとしてためらったような痕跡があった。でも書いてあるのはその一行だけだった。

最後に残された問題は、ケージをどうするかということだった。堀田さんが戻ってくる確率はほぼゼロに近い。トーマスが戻る確率も同じようなものだ。僕は砂と石を捨てて、ケージをバスルームで念入りに洗ってからベランダで乾かした。乾いたケージの中には堀田さんから預かったものを全部入れ、堀田さん宛ての郵便物を紙袋ごと入れた。ただし爬虫類専用ライトだけは出しておいた。僕はそれをキッチンの窓枠に取り付け、寝るときにそれを点けて寝た。とても心が落ち着く光だ。トーマスがそれを目印に戻って来るかもしれないという期待も少しはあったのかもしれない。

はつきり言って仕事は退屈だった。1週間でやめてしまおうと思うような内容だった。一度覚えてしまえばあとは繰り返すだけの単純作業。工場の請負のような仕事だ。おそらくそれを乗り越えれば別の何かが待っているのだというのはわかる。仕事が増えていき、責任が増えていく。でもいまの僕には随分と遠い道のりのように感じられる。もしこれを30年続けられたとしても、僕は胸を張れるだろうか。

社内のあちこちに飾ってある額縁の中の社訓は言う。

- 一、常に尽くし、努力し、向上する
- 一、常に信じ合い、助け合い、譲り合う
- 一、常にあきらめず、投げ出さず、ニゲダサナイ

\*

それから松河さんからは連絡がない。1週間後には電話番号が使えなくなっていた。上の階には新しい住人が住み始めた。郵便受けには堀田さんの名前はもうない。

紫がかった青白いライトに照らされた部屋の中で、僕は毎晩眠りにつく。薄い壁に囲まれ、全体保温された空間の真ん中で、人工の光にまどろむ。小春の陽気が暖雨を降らせ、

僕はじつと耳をそばだてる。僕はトーマスのことを考え、松河さんのことを考え、堀田さんのことを思い出す。その世界の中ではいつもトーマスは眠っている。長く鋭い爪がときどきぴくつと動き、何か固いものに当たる音がする。トーマスの目の前には一人掛けのソファがあつて、松河さんはそこに座ったまま黙々と服を脱いでいる。床の上には松河さんが脱いだ服がうず高く積もっていく。ソファのずっと先の海には錆びた漁船が浮かんでいて、その狭いデッキに立った堀田さんが空っぽの水槽を延々と積み上げている。船は波に揺られ、いくつかの水槽がデッキの上に落ちて粉々に砕けている。でも落ちる瞬間を見ることはできない。ただ水槽が砕け散ったイメージだけが残っている。その恐ろしく不可解で全体的なイメージは、波に飲まれるようにして次第にトーマスの姿に重なっていく。青く濡れたトーマスの隣には、僕の体が横たわっている。僕の体は部屋の中の柔らかい砂の上に無造作に置かれている。トーマスが瞬きをすると、それを合図に僕の丸い耳からごぞごぞとコオロギが這い出てくる。コオロギは一匹ずつ慎重に砂の上に降り立ち、ものすごいスピードで部屋中を埋め尽くしていく。壁までたどりついたコオロギは壁を噛み始め、あちこちに小さな穴を開けてから最後にまた僕の耳に戻ってくる。コオロギは耳の入口近くに張った薄い膜の内側に滑り込むように消えていく。コオロギの足の先には砂が貼りついてざらざらしている。コオロギがいなくなってしまうと、壁に開いた穴が溶けるようにただれ、やがて大きなひとつの穴になる。穴の向こうにはもうひとつ部屋があつて、そこで堀田さんと松河さんが固く抱き合っている。

僕の体は青白い光に包まれる。僕は笑みを浮かべ、そして壁の穴からそっと抜け出ていく。

そこで僕はようやく眠ることができる。温かく、とても浅い眠りだ。

了

このたびは『トーマスの飼い方／真鍋 敢』をご購読いただき誠にありがとうございました。

ホームページにて感想・コメントを承っておりますので、お時間がありましたらご協力をいただきますようお願い致します。

<http://www.kanmanabe.com/>

2006年8月1日 真鍋 敢